

明日に生きる

－作文コンクール入選作品集－

第 31 号



令和 2 年度

東京都産業教育振興会

表紙デザイン

この絵は自分たちが道を作り、進んでいく様子表現しました。なので、道はまだ完璧なものにはなっていません。また、雲は私たち一人一人を表しています。雲はいろいろな形や大きさがあり、全く同じものは一つも存在しません。私たちも自分の個性を生かし、上空へ昇っていく雲のような存在になれたらと思い雲をたくさん描きました。

中央区立日本橋中学校

3年 土肥 優生

明日に生きる

第三十一号

— 作文コンクール入選作品集 —

明日に生きる ―作文コンクール入選作品集― 第三十一号 目次

講 評

作文選考を通じて

中学校の部

選考委員長（荒川区立第五峽田小学校長）

出井 玲子

1

作文選考を通じて

高等学校・専修学校の部

選考委員長（東京都立農産高等学校長）

伊達崎 広

3

中学校の部

最優秀賞 「名もなき家事」

新宿区立西早稲田中学校

三年

實生 葉

5

優秀賞 AIとの共存 く私たちの未来と職業く

新宿区立新宿西戸山中学校

三年

牧野 萌音

6

優秀賞 「ものづくりの喜び」とは

北区立稲付中学校

二年

杉浦 碧

8

佳作 家族で作る料理は私の生きがい

中央区立佃中学校

三年

岩元 優佳

9

佳作 今日も元気にいただきます

中央区立佃中学校

二年

岸本 一紗

11

佳作 職場体験を通して学んだこと

中央区立佃中学校

三年

田中 碧

12

佳作 笑顔の種

中央区立佃中学校

二年

塚本 みか

14

佳作 より良い世界へ、一歩ずつ

中央区立佃中学校

三年

長尾 桜

16

佳作 自分自身への気付き

北区立赤羽岩淵中学校

三年

佐竹 満里菜

18

佳作 夢のきっかけ

北区立赤羽岩淵中学校

三年

高橋 理那

19

佳作 将来の夢

北区立赤羽岩淵中学校

三年

三浦 日向子

21

佳作 苦手だった事を大好きな事に

北区立稲付中学校

一年

滝沢 佳央

22

佳作 授業を通して

葛飾区立堀切中学校

三年

五十嵐 蓮

24

佳作 職場体験で学んだこと

葛飾区立堀切中学校

三年

梅林 めぐみ

25

佳作 職場体験で気づいた仕事に対する価値観

葛飾区立堀切中学校

三年

古晒 真緒

27

高等学校の部

佳	作	受け取り手との関わり	葛飾区立四ツ木中学校	三年	佐藤史織	28
佳	作	職場体験が教えてくれた私の夢	江戸川区立松江第四中学校	三年	内田妃咲	30
佳	作	自分は何をしたいのか	江戸川区立松江第五中学校	三年	小川恵加	31
最優秀賞		生命（いのち）と個性	東京都立瑞穂農芸高等学校	三年	武田博乃	34
優秀賞		農業をして変わったこと	東京都立農業高等学校	二年	芦沢かりん	36
優秀賞		看護師としてどうあるべきか	愛国高等学校	三年	松本百合子	37
優秀賞		実習から得たもの	愛国高等学校	三年	山本結子	39
佳	作	世界で活躍できる日本料理人をめざして	東京都立農業高等学校	二年	阪口和紀	41
佳	作	視点が変わると	東京都立農業高等学校	二年	高松美琴	43
佳	作	今生きる私達に出来ること	東京都立農芸高等学校	二年	岩本有未	45
佳	作	都市緑化の発達	東京都立農芸高等学校	三年	仲山祐未	46
佳	作	私が私になるまで	東京都立瑞穂農芸高等学校	一年	町妃菜子	48
佳	作	食品を作ることもまた、楽しいことなのだ	東京都立瑞穂農芸高等学校	一年	村田彩羽	50
佳	作	私にできること	東京都立町田工業高等学校	三年	山本爽	52
佳	作	日本の工業高校に進学するぞ！				
		くネパール・カトマンズからの挑戦く	東京都立六郷工科高等学校	三年	サキヤアシス	53
佳	作	開発途上国発展への私の挑戦	東京都立第三商業高等学校	三年	橋本咲良	55
佳	作	将来のために	東京都立忍岡高等学校	三年	桐谷海月	57
佳	作	将来の夢	東京都立忍岡高等学校	三年	牧京香	58

専修学校の部

佳	作	病棟保育士への夢に向かって	東京都立忍岡高等学校	三年	槇西寧々花	60
佳	作	折り合いをつける	東京工業大学附属 科学技術高等学校	三年	高杉真由子	61
佳	作	新たに知る	愛国高等学校	一年	構野瑠奈	63
佳	作	看護師と人	愛国高等学校	二年	杉本未来	65
佳	作	私の未来設計図	日本工業大学駒場高等学校	二年	野口俊輔	67

ページ

イラストの部

佳	作	二つの夢を追いかける	中央工学校	一年	今野玲奈	69
---	---	------------	-------	----	------	----

ページ

イラスト賞	中央区立日本橋中学校	三年	土肥優生	70
-------	------------	----	------	----

令和2年度作文コンクール応募校等一覧（応募数・入選数）

応募数・学校数・入選数の変化

作文のテーマ別応募数一覧

作文のテーマ別応募数グラフ

令和2年度 作文選考委員名簿

あとがき

76	75	74	73	72	71
----	----	----	----	----	----

作文選考を通じて

中学校の部 選考委員長

荒川区立第五峡田小学校長

出井 玲子



今年度は、16校から108編の応募がありました。昨年度より約二割の減となりましたが、コロナ禍にあつて、休校が続く中、多くの作品を応募いただきました。一次審査、二次審査を経て、18作品が入選し、最優秀作品1編、優秀作品2編、佳作15編を選考いたしました。

今年度の作品は、これまでに引き続いて、職場体験学習から、働くことの喜びや大切さを実感し将来に生かそうとするものも多くありました。しかし、この職場体験学習は、多くは昨年度のことを振り返ったものでした。今年度中止せざるを得なかった状況の中で、これまで以上に体験学習をさせていただけること自体への感謝の気持ちを表す作品が目立ちました。また、「技術・家庭」の授業を通して学びを得たことや進路・将来の夢、休校中に家庭で過ごす時間が増えた中で気付いたことをテーマにした作品もありました。他に、医療従事者の方の姿から働くことの意味を考

える作品もありました。

今回、最優秀賞を受賞した實生葉さんの「名もなき家事」も家庭生活を見直すことから始まります。家庭分野の授業での「家事の分類」をきっかけにお家の方の行動を見てみると「調理、洗濯、掃除…」と、名の付く仕事の陰にある小さな仕事、気遣い、「名もなき家事」の何と多いことか、その積み重ねで家庭生活が成り立っているのと改めて気付いたと言います。目の付け所の素晴らしさに感服です。さらに「名もなき仕事」の数々を職場体験学習にも重ね、話しを社会にまで広げています。作品は「どんな些細なことでもその向こうに多くの人の努力や仕事があつて成り立っているということを忘れずにいたい。」と結ばれています。仕事のこと、生活のことをこれからの自分の生き方につなげて述べていて、大人も考えさせられる深い内容でした。

優秀賞の牧野萌音さん「AIとの共存〜私たちの未来と職業〜」は、人間とAIとの共存を牧野さんなりに分析しています。AI「人工知能 (Artificial Intelligence)」の特徴をよく調べていて、共存の可能性が現実的であると感じました。現代の課題であるSDGs「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称の視点も盛り込まれています。「AIは人間の敵ではない」という言葉に希望があります。

もう一つの優秀賞の杉浦碧さん「『ものづくりの喜び』とは」からは、技術分野の授業に対するワクワク感や一生懸命さがよく伝わってきました。杉浦さんが「ものづくり」への価値観を大きく変え、伝統文化に誇りをもつ姿に頼もしさを感じました。

全体的に「体験を基に自分の考えや将来の夢などを記述してい

る。」「結論を述べてから理由や状況を示す。」など内容の深みや構成の工夫があり、読み応えのある作品が揃っていました。

また、今回は表紙のイラストの応募が多くありました。どの作品も素晴らしく、秀作揃いの激戦となり選考が難航したことをお伝えしておきます。

最後になりましたが、今回の「作文コンクール」に応募していただいた生徒の皆さん、ありがとうございました。未曾有のごとの中ですが、寄せられた作品の数々にこれまでにない新しい視点の兆しが見えるコンクールでもありました。ご指導いただきました先生方、貴重な体験をさせていただきました地域・事業所の皆様、保護者の皆様に感謝申し上げます。



作文選考を通じて

高等学校・専修学校の部 選考委員長

東京都立農産高等学校長

伊達崎 広



今年度は、高等学校の部には二十一校から百三十作品、専修学校の部には一校一作品の応募がありました。一次審査、二次審査を経て、高等学校の部では最優秀賞一作品、優秀賞三作品、佳作十六作品、専修学校の部では、佳作一作品を決定いたしました。

高等学校の部の最優秀賞は、都立瑞穂農芸高等学校 武田博乃さんの作品で、題名は「生命（いのち）と個性」です。この作品は、生命（いのち）と向き合う実習での鮮烈な体験と先生の一言から教師になることを志す作者の心の成長が描かれています。教師になる固い決意を述べた力強い作品でした。

優秀賞は、愛国高等学校 松本百合子さんの「看護師としてどうあるべきか」、愛国高等学校 山本結子さんの「実習から得たもの」、都立農業高等学校 芦沢かりんさんの「農業をして変わったこと」の三作品でした。松本さんの作品は、母の勧めで

看護師を目指し始めた作者が高校で看護について学び、実習での体験を積み重ねる中で、看護師と患者の信頼関係の重要性に気づき、理想の看護師像を具体的にしていきます。学び、体験する中で悩み考え、自分自身の答えを導きだしていく作者の成長の軌跡を感じる作品でした。山本さんの作品は、コロナ禍により病院実習が中止となる中、学内実習でできることに目を向け、全力で取り組むことにより、将来看護師を目指す者としての様々な気付きがありました。ものごとを前向きに捉え、諦めるのではなく努力することに大きな価値があることを気付かせてくれる作品でした。芦沢さんの作品は、自分の作った作物を販売する実習を通して、多くの人を笑顔にできる農業の魅力を感じ、世の中の農業に対する考えを変えていくことを考えます。やる前に決めつけず一度やってみる、挑戦の大切さを訴える作品でした。

選考に当たっては、どの作品も作者の個性が込められた力作であり、選考委員を大変悩ませるものでした。そのため、優秀作品を選定する作業には多くの時間を費やしました。審査は、独自性や一貫性があるか、具体的な体験や経験を元にした魅力ある内容であるか等から行いました。その中で、学習や体験からの学びや、他者や社会との関わりによる成長を感じさせる作品、社会貢献の意欲を強く感じる作品は、高い評価を受けました。

審査を通して、専門学科の学習や実習での体験が、生徒の生き方や考え方に大きな影響を与えていることを改めて実感しました。教員の指導が生徒をやる気にさせ、大きく羽ばたききっかけとなることも感じました。応募された作品の一つ一

つに生徒の思いが詰っていたと思います。審査委員の中からは「生徒の将来につながる体験をさせたい。それを文章につなげる力を育てたい」という声も上がりました。

最後になりましたが、今回の作文コンクールに応募いただいた多くの生徒・学生の皆さん、御指導をいただいた各校の先生方に感謝申し上げます。産業教育の中での体験とそこから得られる学びや成長を広く社会の皆様知っていただくことは、とても意味のあることと考えています。来年度も各校種・各学科から幅広い作品を応募してくださいますようお願い申し上げます。



中学校の部 最優秀賞

「名もなき家事」

新宿区立西早稲田中学校 三年

實 生 葉

家庭においても、社会においても、私たちの生活は、多くの働く人によって支えられている。しかし私たちは、身近に働く人の工夫や努力をしっかりと見ることができているだろうか。

「家事といえどどんな仕事がありますか。」こう聞かれたとき、多くの人が調理・洗濯・掃除などをあげるだろう。しかし、それだけでは私たちの家庭生活は成り立たない。家庭科の学習を通じて、私は「名もなき家事」の大切さを知った。

「名もなき家事」とは、調理や洗濯のように一定の呼び名がついているわけではなく、そしてあまり目立った家事として扱われない小さな仕事のことだ。

三年生になり、家庭科の授業で、ある一つの課題が出された。それは家の中で行われている家事を衣生活、食生活、住生活、家族に関することの四つに分類し、全て書き出すことだった。私はとりあえず、思いつく限りの家事を順番に挙げていった。

日常の中で、家族の行動を見ていればもっと見つかるのではないかと思った私は、毎日注意して母の仕事を見るようになった。すると、毎日見れば見るほど課題のプリントに書き連ねる

家事の個数は多くなっていくのだ。ゴミ箱に袋を掛ける、洗濯用ハンガーを片付ける、古新聞をまとめる。普段気付かないところでこんなにも多くの仕事があり、その一つ一つは小さなことだけれど、それが積み重なって膨大な量になっていることに気付いた。私たちの生活はそれらの積み重ねのおかげで成り立っていると感じた。

提出した課題プリントを使った授業で、よく調べられていた人のプリントが紹介された。先生がプロジェクトに映し出したプリントには、私が挙げた倍ぐらいの数の家事が記されていた。それを見ると私の気付かなかったものが多く、私の調べた「名もなき家事」は、ほんの一部に過ぎなかったのだ。だがおそらくその人が挙げたものも、「名もなき家事」の全てではない。生活の中には、無数の家事が隠れており、実際にやってみなければわからないこと、簡単に見えることでも実際にやってみると難しいことが多くあるということを知った。

また、実際に体験しないと気付かないものが多くある、ということを、私はコーヒэшョップでの職業体験でも感じた。二年生の秋に行われた職業体験の初日、最初に学んだことは、コーヒーについて勉強することだった。私は、飲み物をつくり提供することやテーブルを掃除することが仕事だと思っていたが、それ以前にコーヒーの知識がそのお店で働く上でとても重要だったのだ。また、コーヒэшョップでは、アルバイトの大学生も多く働いていたが、その人たちも社員さんと同様にコーヒーについて勉強していた。コーヒэшョップでの職業体験は、そこに携わる全ての人が利用者の見えないところで努力や工夫をしているということに気付けた三日間だった。体験し

たからこそ、多くのことを発見できたのだ。

街は様々なお店であふれており、私たちが普段利用しているいずれのお店でも、私たちに見えない努力があるのだろう。職業体験を終えて、私はこう思うようになった。私たちは、観察をして、体験をして、初めて見えないものに気付くのだ。

家庭科での「名もなき家事」調べや職業体験での経験からも、私たちの生活は様々な人の見えない仕事で成り立っていると考える。そして、その一つ一つの内容を普段の生活で見つけることは難しいだろう。だからこそ私は、多くの経験をして少しでも私たちの生活を支えているものを見つけていきたい。まずは家庭での生活から、少しでも家族の代わりに役割が果たせるように。また、社会に出て働くようになったときに見えない所でも誰かの役に立てるように。機会があれば、できるだけ多くの体験をし、多くの人の意見を聞いていきたい。そして、どんな些細なことでもその向こうに多くの人の努力や仕事があって成り立っているということを忘れずにいたい。



中学校の部 優秀賞

AIとの共存 〈私たちの未来と職業〉

新宿区立新宿西戸山中学校 三年

牧野 萌音

「十年後には今ある職業の70%が消える。」、中学校の進路学習の時間に、そんな説があると紹介され、私はぞっとしました。AI（人工知能）によって人間の仕事が取って代わられる、つまり私たちの仕事が奪われてしまうと感じたからです。そこで、AIと私たちの暮らしの現状を調べ、そこから今後私たちがAIとどのように関わっていくべきか、AIと人間の職業をどのように分担していくかということを私なりに考えてみました。

私たちの身のまわりを見ると、洗濯機やエアコン、スマートフォンなど、AIの機能を搭載した家電や電子機器が増えてきています。AIは今までの使用履歴を記録し、そこから学習して、私たちがより快適に便利に生活できるように役立ててくれるのです。

さらに調べてみると、AIは私たち人間ができない特殊な役割を果たしたり、物理的に困難な仕事を担ったりすることもできるようです。例えば空港や大きな駅ではAIを搭載したロボットが活躍しています。海外からの旅行者など、知らない土

地に初めて降りたち、日本語が話せない人に対して、多言語でわかりやすくサポートしてくれるロボットはすぐくありがたい存在だと思っています。また、農業にAIがうまく生かされている例もあります。米農家の方が害虫による被害を減らすためにAI搭載ドローンを飛ばして害虫を駆除し、その際に得た気候の情報や稲の発育状況、土の状態などをAIに記録させ、その後の収穫量を向上させるためのアドバイスをAIがするそうです。このように人間には簡単にできないことをAIがサポートしてくれる、私たちの暮らしは格段に便利になるし、また働く人にとっても良いことがいっぱいありそうです。

では「便利だから」という理由で何でもかんでもAIに任せていったいいのかというと、私は違うと思います。始めに述べた「AIに取って代わられる職業」の中には「警察官」や「弁護士」も挙がっているようですが、それは、AIに「できること」かもしれないけれど「させるべきこと」ではないのではないかと私は思います。確かに、これまでの犯罪履歴を記録して今後の治安維持につなげたり、法律や判例を記録して弁護や裁判に利用したりすることはできるかもしれませんが、しかし、「警察官」や「弁護士」の仕事はただ「結果」を出すだけではなく、それまでの過程で人と関わり、話をして、人間関係を作っていくことで成り立っているものだと思うからです。そう考えると、「医者や薬剤師」も治療や薬を出すことはAIにもできるけど、患者さんに寄り添って安心感を与えたり、励ましたりすることは人間のほうがいいし、「教師」も知識を与えたり習得させることはAIにもできるけど、児童生徒と関わることで社会性を育むのはやはり人間の方がいいのではないかと思う

のです。

また、「人の手を作り出すことで価値をもつもの」もあります。例えば、伝統工芸品のように長い年月の中で引き継がれてきた美しさや機能性をもったもの。これは手作りであることの温か味や、その土地の暮らしや風土の中で生まれた感覚が息づいています。伝統工芸には、同じ規格の商品をいかに効率よく大量に、そして安価で生産するかという「大量生産・大量消費」の感覚とは違ったものが求められているのではないのでしょうか。

さらに、AIという技術そのものも人の手によって生まれた、ということをお忘れてはいけません。人間には「人間がより便利に、快適に暮らすため」の工夫を凝らすことができます。その時その時の社会情勢や気候や環境、その時代の人たちのニーズに合わせて試行錯誤しながら新たな技術を発見、開発していくことは今後も人間が担っていく役割だと思っています。

AIは現在もこれから、私たち人間の生活を豊かにする可能性を秘めています。しかし、何でもかんでもAIに頼りすぎることは、必ずしも人間を幸せにしてくれる訳ではありません。だから私たちはAIが人間をサポートするべき部分と、私たち人間が担っていくべき部分をしっかりと見極めていかなければならないと思います。そしてそのためには私たち一人一人がAIについてよく知り、AIとともに生きる未来について考えていく必要があります。

「AIは人間の敵ではない」

AIとの共存について知り、考えた今では、私はAIに職業を奪われるとは思っていません。多くの人が今より快適に安全

に、そして幸せに暮らせるように、AIをうまく活用して、AIとともに生きていく。そんな未来を私は前向きにとらえて歩んでいきたいです。

「ものづくりの喜び」とは

北区立稲付中学校 二年

杉 浦 碧

私は、「ものづくり」と聞いて思い浮かべるのは、専門技術、伝統、工業など何となくぼんやりとしたイメージばかりでした。

中学校に入学し、「技術・家庭」という初めて聞く教科の名前を耳にし、とてもワクワクしたことをよく覚えています。授業で学ぶことは、加工や産業に関する専門的なことが多く、戸惑いを感じたこともありましたが、知れば知るほどおもしろいと感じるようになっていき、私は技術の授業が好きになりました。

木材加工の授業でティッシュラックを製作しました。大きな板と釘が配られた時、ここからどのような作品になっていくのだろうと心の中は、ワクワクと期待感に満ちていました。しかし、いざ作業を始めてみると、思い通りにはなかなかいかず、行き詰まってしまうことも何度ありました。慣れない道具を使い、初めて行う作業も多く、作業が遅れて焦りを感じたりも

しました。そんな中でも、一つ一つ丁寧に心を込めて作業することだけは忘れず、最後まで一生懸命に製作しました。出来上がった時は、世界中に一つしかない作品に愛情が沸き、切断の際に曲がってしまった直線や釘打ちに失敗した傷にさえ自分の思いが詰まっているような、そんな気がしました。うまくいかなかった時の悔しさ、その壁を乗り越えようとした時の新たな発見やひらめき、出来上がった時の達成感など、この授業を通して様々な自分に出会うことが出来、「ものづくりの喜びと楽しさ」を学んだような気がします。

日本には、かつて「ものづくり大国ニッポン」と言われた時代がありました。職人が長年の知識と経験から一つ一つ手作業で、情熱と愛情を持って作り上げていくものは、とても美しく、日本を支えてきました。私は、铸物職人のドキュメンタリー番組を見たことがあります。小さな町工場に、世界中から仕事の依頼をする人々が訪れていて、私は不思議に思いました。大企業ではなく、なぜこんなに小さな町工場に依頼するのだろうか――そこには、特殊な部品を作る技術がありました。日本人は、折り紙のように角と角をきっちりそろえて折り、平面からより複雑で立体的な作品を生み出すなど、手先が器用な所があります。まさに、日本人の良さがそこには生きていたのです。しかしながら、地道で気力、体力共に使う大変な作業ということもあり、担い手となる人材が不足しているそうです。私達の身の周りにあるものは、機械などで大量生産されたものが多いでしょう。しかし、手作業でしか生み出すことのできない美しさや趣のあるものもたくさんあると思います。

「ものづくり」とは、作り手がものに込めた思いを使い手が

感じ取り、互いの心をものを通じて通わせ合うことで、本当の良さ、価値が生まれるのではないのでしょうか。このように思いが通い合ったと感じた時、作り手は「ものづくりの喜び」を感じることができるとおもいました。

今回、「ものづくりの喜び」について考え、私の価値観は大きく変化しました。今までは、「もの」とは何か深く考えることはなく、普通に使っていました。しかし、技術の授業を通して改めて考えてみると、製品そのものだけではなく、もの以上の付加価値が大切だと思うようになりました。製品を作る中でより良くするために考えること、使用感であったり、デザインであったりと一つ一つの製品には数多くのものが詰まっています。私の考える「ものづくり」とは、ただ作るだけではなく、作り手の想いや創造性を加えることです。そして、より良いものを作ろうとする中で生まれる人と人との交流こそが「ものづくりの喜び」だと考えています。

「ものづくり」は、誰でも主人公になることができます。どんなものをどのような想いで作るのか、その物語は人それぞれです。自分なりの「ものづくりの喜び」を、これからも探求し続けていきたいと思っています。



中学校の部 佳作

家族で作る料理は私の生きがい

中央区立佃中学校 三年

岩 元 優 佳

私は中学校三年生で地元の中学校に通っています。今日はいつも通りに下校して、真つすぐ家に向かいました。途中スパーが見えて様々な新鮮な食材が揃っており、母は今日の夕食に何を作ってくれるか考えていました。家についたら母が玄関にいて、笑顔で迎えてくれました。ところが台所に向かうとリビングを通った時、父がいました。この時間に父がいることはめずらしく、その時台所から懐かしい匂いがしました。私はその時すぐに父が風邪をひいたのだと分かりました。「だからあのスープを作ったんだ」。私は母に笑いながら言いました。家族の誰かが体調不良の時、母は薬膳料理を作ります。いろんな食材と漢方薬を使って何時間もかけて煮込み、これを食べた次の日、父は元気になって仕事に行きました。

私と姉は小さい頃から、余程の高熱を出した以外病院に行ったことがありません。私が体調不良の時、母は美味しい料理を作ってくれます。なぜかそれを食べたら元気が出るのです。胃腸の調子が悪い時はおかゆが出て、運動の後は肉料

理と甘いものが出ます。その時の私達の体調をよく見て様々な料理が出ます。私が小さい時、おばあちゃんも同じことをしてくれたと母が言っていました。母の料理はどんなときも私達の生きがいになります。そして私はそんな母の料理が大好きです。

私の母は中国の出身ですが、中華料理を作る以外、和食や洋食も作ります。日本での生活も長いので、日本の食文化が染みついたそうです。「美味しい物には国境がないんだよ」と母はいつも言っています。そして私と姉は母が料理をするところを毎日見ていたのでいつの間にか、自分たちも料理に興味を持つようになりました。私はスイーツ作りが好きで、姉は炒め物を作るのが好きです。このコロナの「ステイホーム」の自粛期間に家族と一緒に過ごす時間が長くて、家族で料理することが一つの楽しみでした。

三月から、学校が休校になり、父と母の仕事が在宅ワークになりました。家では母ができる限り食材選びから盛り付けまで工夫して、彩りが良くて美味しい料理をたくさん作ってくれました。父は肉を焼き、私達の好みのタレを作ってくれます。それもとてもおいしく、心が温まりました。姉は得意の野菜炒めや卵料理を作ってくれてみんなが協力してご飯を作りました。一方、受験生の私は作ってもらうことが多いですが、たまに学校の家庭科で習った料理を作ります。とても簡単な料理ではありましたが、みんな喜んでくれてとても嬉しかったです。このようにコロナの自粛期間に外食に行けず、家族でメニューを考えて、料理を作り、それを食べながら感想を言い合うことが毎日の日常の一部になっていました。家

族のみんなが作った料理や家族みんなのよろこびが、私の生きがいになり、私を支えてくれました。そのおかげで「ステイホーム」の期間を楽しく過ごせ、家族の絆がさらに深まりました。

ところが、私と姉がどんな工夫をしても母が作った料理と味がちがうことに気がつきました。母に聞くと「料理は簡単そうに見えるけど、奥深いんだよ。食材の相性、調味料を入れるタイミング、その時に作る人の気持ちなどいろいろな要素に影響されるから同じ食材を作ってもその人によって料理の味がちがうよ」と言いました。人によって味がちがうということにはおどろきました。とても面白いと思いました。母は毎日、ご飯を作ってくれる時、家族に愛情を込めて、食材の相性と家族の体調のことも考慮し、一食一食作ることを知りました。これから私は家族のために料理を学びたいと思います。それに、料理は色彩効果と味覚効果があつて五感が満たされます。彩りが良くて味が美味しい料理は人々を幸せにします。さらに中国では「医食同源」という古い言い伝えがあります。それは、多くの食材は薬材になるという意味です。また、漢方薬と食材と一緒に料理して食べる文化があり薬膳料理と言います。日本ではめずらしいですが、その料理を食べると健康な体が作れて免疫力を高める効果があります。

私は一日三食から、生きがいとたくさんのかを学んでいます。今は少しの知識しかありませんが、いつかは母のように食材と薬剤をうまく使いこなして家族がくれる生きがいを感じたいです。そして家族だけでなく人々にも幸せを届けたいです。

今日も元気にいただきます

中央区立佃中学校 二年

岸 本 一 紗

待ちに待った職場体験の行き先発表。沢山の生徒達のうずに流されながら、ようやく私は自分の名前を見つけれられた。

隣に書いてある行き先は「佃中給食室」。考えもしなかったこの場所、友人にも笑われたりなぐさめられたりされ、ハズレだと思ったこの職場体験。その三日間が、かけがえのないものとなったのを知るのは三日間を過ごした後の話で。

緊張と不安をかくせなかった初日。だがそれらの感情は大きな驚きと仕事への集中で吹きとんでしまったのだ。少ない人数で大量の給食をつくり、25℃を超える室内で力仕事の連続。ただその仕事を行うのではなく、その仕事にどれだけ丁寧に打ち込み、一生懸命になれるか。学校生活では到底知ることのできなかった働くことの大変さを目の当たりにした。だが、それは全く苦ではなかった。働くことがどうしようもなく楽しく、教わる一つ一つの仕事に愛着がわいてきたのだ。それは給食室の方々が未熟で不慣れな私達に一から十まで真剣に教えてくださったからである。自分の仕事もある中で行ってくださった主事さん方の温かい気遣いのおかげだ。「有難うございます」では伝え切れないほどの感謝は、未だに私の心から離れることはない。

二日目の職場体験日。行っていく仕事の種類が増えていくのと同時に、楽しみや感動も大きくなっていき、何もかもが新鮮であった。お昼が過ぎて午後の仕事に取りかかる際に、一学年、一クラスずつのワゴンの中を見てみた。完食してくれているワゴンのワゴンを見た時の嬉しさと感動は言葉では言い表せない。沢山の手で皆が喜んでくれるようにと作り、数え切れないほどの人々の思いと自分の思いが入っているものを食べてもらうのは、こんなにも幸せで、次の仕事へのやりがいになるのかと肌身で感じた。客観的に給食をみられるようになったのはその出来事の直後であった。次も完食してもらえるように、美味しいものを作りたい。皆からみての給食が学校生活での楽しみであるようにしたいと思えるようになり、給食室の方は毎回このような思いで作っていたのかと気づき、職場体験行き先発表の時の自分が恥ずかしく情けなかった。涙があふれてきそうになった。あつという間に時は流れ最終日。悔いのない日にしたいと思ったのは他の生徒もおなじだとおもう。いつも通りに仕事を進めていると、チーフにスープ作りを任された。今日まで、何をしてきただろう。どんな仕事も、自分なりに一生懸命行ってきた、全てが楽しいであふれていた。ただ、この大役をまかされるとは思っているはずもなく、一瞬なにがなんだか分からなくなった。嬉しさと興奮と達成感で私の心は一杯一杯であった。実際行くとこれが本当に大変であり、大鍋の中にあるスープを大ベラでかき混ぜることが大変な力仕事であった。けれど、任されたからには最後までやりとげなければいけない義務がある。あたり前に食べていた給食には見えないところで誰かの苦労がかかっていて、その思いはこんなものだったので

ある。やっとの思いでできあがりチーフ方に味見をしてもらった。その時に見た主事さん方の笑顔が頭からはなれない。最終日に皆で食べた皆の思いが込もった給食は、今まで食べた給食の中で一番美味しく、暖かいものであった。

働くということ。誰かのために何かをつくりあげるといふこと。普段私達は何気なく使い、食べているものは、あたり前に私達の前に在るものではなく、誰かの思いや時間があってこそ存在するものであり、働くということはそういうことなのだ。今回の職場体験でそのような事や働くことの楽しさを実際にその現場で感じられたことは私や他の生徒達にとって素晴らしい体験であり、私達をつくりあげていく土台となるだろう。給食室の方々、先生方、地域の方々には感謝しきれない。一生懸命、真剣に取り組んだ仕事は、とてもきれいに仕上がる。仕事には感情がでるのだ。どんな仕事も真剣に取り組むことの大切さは実際に体験しないと本当に知れない。分かった気になるのではなく、まずやってみることが大切なのである。自分の身近にあるものに、あたり前に思わないで感謝する。たった三日間であったのに、そこで得た学びと感動は言いつくせない。この三日間は私にとってかけがえのないものになった。ここで改めて知った魔法の言葉がある。

「今日も元気に、いただきます。」



職場体験を通して学んだこと

中央区立佃中学校 三年

田 中 碧

私の中学校では二年生の二月に三日間職場体験をします。私は将来小学校の先生になりたかったので、体験先を選ぶアンケート用紙の子どもにかかわる仕事という欄に丸を付けました。そして決まった私の体験先は児童館でした。児童館は、赤ちゃんから十八歳までの子供が利用できる施設です。私にぴったりの体験先だったと思います。

体験先での主な仕事は、午前中のゼロ歳児から三歳児までの子供と保護者が参加する「赤ちゃんクラブ」や、午後の小学生が参加する学童クラブのお手伝いをする事です。空いた時間は遊びに来た小さい子と一緒に遊んだり、イベントの飾りや材料の用意をしたりしました。

午前の赤ちゃんクラブでは、職員と親子で遊んだり踊ったりします。私も一緒に遊んだり踊ったりしました。初めて三歳児のクラスに入って仕事をした時は、「子どもたちが怖がってしまっただろうしう。」、「ちゃんと笑顔で接することができただろうか。」と不安で一杯でした。おもちゃやマットを準備しましたが意外と重くて大変でした。そして赤ちゃんクラブが始まりました。その日のテーマは「新聞紙で遊ぼう。」でした。子供たちは新聞紙にくるまったり、新聞紙をちぎって投げたり

して楽しそうに遊んでいました。「みんなで一斉に投げるよ。」と職員の合図で新聞紙を花びらのようにして集めて投げました。まるで雪が降ったみたいでした。なかなか家の中ではできない遊びに小さい子は勿論でしたが、中学生の私も大はしゃぎで遊んでしまいました。「キャー」と大きな声がして驚いて声の方を見ると、きらきらと目を輝かせて笑顔で子供たちが走り回っていました。その楽しそうな姿と輝く笑顔を見ていたら、今までの不安な気持ちや疲れがどこかへ飛んでいくように感じました。すると職員が近くへ来て、

「この笑顔が見たいから頑張ってしまうのよねえ。」
と言っていました。職員の気持ちがよく分かりました。

午後の学童では、放課後に小学生が遊びに来ます。私は一緒にクイズをしたりゲームをしたりしました。私が体験に行った日は、フェルトを編んでバックやブレスレットを作るイベントがありました。私はその作り方を教えてあげる仕事をしました。器用な子やなかなか出来ない子などいろんな子がいました。私はその子その子に合わせて教えてあげることを心がけました。ある女の子はなかなか出来なくて諦めかけていました。そこで私は一生懸命励ましてなるべく分かりやすく教えられるよう頑張りました。そしてやっと完成した髪飾りを付けた女の子はとても嬉しそうでした。笑顔で、

「お姉ちゃん、ありがとう。」

と言ってくれました。時間もかかったし、とても大変だったけど私まで嬉しくなり、これもまた疲れが飛んでいくように感じました。

職場体験で経験したこれらのことを通して、私は大きく二

つのことを学びました。一つ目は仕事をするこの大変さです。児童館は重いものを持ったり元氣いっぱいな子供たちと遊んだりする力仕事や、飾り作りなど集中力が必要な細かい仕事など大変な仕事が多かったです。児童館だけでなく他の仕事も大変なのだろうと思います。働いている皆さんはすごいと思います。感謝の気持ちを持たなければならぬと改めて思いました。二つ目は大変な仕事でも頑張ることでも人を笑顔にでき、その笑顔を見ることが私自身に頑張る力が生まれるということです。子どもたちの笑顔を見ると、疲れが消えてなくなり、嬉しく温かい気持ちになりました。きっと世の中の働いている人たちは笑顔や感謝の言葉を糧に毎日頑張っているのだと思います。たくさんの子供たちや保護者を笑顔にしている児童館の職員たちは格好いいと思います。私もたくさんの人を笑顔にできるような人になりたいと思いました。

児童館で職場体験を経て児童館のことを更に知りたいと思い、調べてみました。児童館は子どもたちに遊び場を提供し、楽しく過ごす場だと思っていました。しかし、都市化による子どもの遊び場や居場所の不足はもとより、子育て不安や低い自己肯定感、いじめや非行問題など、現代の子どもを巡る問題は深刻化していることを知りました。そこで、そのような問題を抱える子どもや保護者たちを支えることも大事な児童館の役目だと知りました。

私は、将来、生徒一人一人にしっかり向き合い、笑顔にすることができる教師になりたいと思っています。教師の仕事はとても大変だと思います。でも、私が頑張る姿を生徒が見て、児童館で私を感じたようなことを感じてくれたらいいなと思い

ます。そして私も生徒の笑顔を見て、仕事を頑張ることで嬉しさや喜びが返ってくることを実感したいです。そして、問題を抱える子供たちを一人でも減らせるように尽力したいと思います。そう思わせてくれた職場体験の授業はとってもいい取り組みだと思っています。

笑顔の種

中央区立佃中学校 二年

塚本みか

栄養素。栄養素と言われて何が頭に思い浮かぶだろうか。私は学校の家庭の授業で栄養素について学んでいる。小学校で学んでいたものとは全く違い興味を惹かれた。私は栄養素と言われてスポーツが思い浮かんだ。なぜなら、栄養素と一番縁があるのはきっと、スポーツ選手だろう。スポーツ選手は食事の時に「栄養バランスをとっても考えている」という印象がある。そこで、私は相撲、マラソン、サッカーという三つの違うスポーツに着目した。そして、それぞれの選手の食事での栄養素の摂り方について調べ、考えた。

まず、相撲。力士は一日二食で昼と夜だけ食べる。ここで私は衝撃を受けた。常に食べているという印象があるにも関わらず、私たちよりも食事回数が少ない。昼に体を作るためにちゃんこ鍋をたくさん食べるが、夜は私たちと同じくらいしか食べ

ない。また、野菜もきっちり摂る。栄養と脂肪を蓄えることが重要なようだ。力士といえばちゃんこ鍋だが、ちゃんこ鍋を食べる人の順番があるらしい。番付が高い力士から順に食べていくそうだ。順番に食事を食べていくスポーツはそうそうないのではないだろうか。

次に、マラソン。マラソン選手は相撲と違い一日三食。五大栄養素をしっかり摂ることが重要だ。朝食で摂れないのなら、昼、一日でダメなら一週間だと気持ちに余裕を持ち無理をしないことも大切だ。マラソン選手には、間食というものがあり、炭水化物を蓄える必要がある。レース前日に井物やお重を食べ、炭水化物の摂取量を増やしているそうだ。レース直前には消化しやすくすぐにエネルギーに変わるものを摂取する。また、選手たちは一日に大量の水分を体に取り入れなければならない。そして、食事のためのセミナーがあるほど食事を大切にしている。バランスの良い食事を学び、技術を体の内側から上げていけるようにしているのだろう。だから、選手たちは食事もトレーニングの一部だと考えているようだ。

最後にサッカー。サッカー選手は一日三食とマラソンと同じだが、相撲ともマラソンとも違うところがあった。それは、朝食に力を入れているということ。朝食をバランス良く食べることが重要とされているようだ。サッカーは一日の初めから気を抜く、気合を入れて行けというような意味を込めて朝食に力を入れてい入るのではと考えた。他にも違うところがある。それは、夜食と軽食というものがあること。これでいくとサッカーが三つのスポーツの中で一番食事回数が多いということになる。私はまた衝撃を受けた。たくさん食べていないという印象がある

ものほど食事回数が多く、たくさん食べているという印象があるものほど食事回数が少ない。印象だけで物事を決めつけるのはいけないと改めて感じた。

私が調べた三つのスポーツ全てに共通することがあった。それは食事は基本であり、ベストを尽くすための最高のものであるということ。私は、どのスポーツも全て食事が始まり、スタートだと思った。食事をせずにベストを尽くせるスポーツはきつとないだろう。食事で体調を整え、さらに手作りを味わうことで心も体も温まる。そして「感謝」という二文字を手に入れる。感謝という二文字を手に入れることは決して簡単なことではない。手に入れるためにはそれまでの事に関わってきた人々のことを考える、頭に入れる必要がある。しかし、私たちは当たり前のように頭に入っている。なぜなら、私たちが食事をする前に言う「いただきます」食事をした後には言う「ごちそうさま」の二つの言葉。これは、関わってきた人々のことを考えて言う感謝の言葉だ。私たちはただ感謝という言葉を手に入れたくてそれらの言葉を言っているわけではない。私たちのところまで食事を届けてくれた人々に心からお礼を言っているのである。つまり、私たちは誰でも当たり前前に輝く感謝を手に入れることができるのだ。

また、スポーツ選手ならば、栄養を大切に栄養から考えることで何を手に入れられるだろうか。選手たちは勝利という大きな栄光を手に入れることができる。そして、笑顔になれる。そうすると、この勝利と笑顔は栄養素からつくられたわけだ。栄養素は感謝だけでなく勝利、笑顔までもつくりあげた。これがスポーツ選手が食事とトレーニングの一部にしている理由

なのだと思ふ。一方、私たちは食事、栄養素から人を笑顔にする方法はないのだろうか。私たちが食事から人を笑顔にする方法は簡単だ。好ききらいをせず、残さず食べること。これをすれば、自分の家族、食事を作ってくれた人、食材を育ててくれた人など食事に関わった人全員が笑顔になれる。

食事という小さな当たり前が輝く笑顔へと変わっていく。栄養素という世界に一歩足を踏み入れただけでこんなにも素敵なことに気づくと誰が予想できただろうか。私が授業で栄養素を学んでいる時は全く思わなかったことも、少し考えることで気づかせてくれた。もしかすると、栄養素という言葉には大きな可能性を秘めているのかもしれない。きっとこれは一つの言葉に限らない。これをきっかけに私はこのような言葉をまた見つけていきたい。

栄養素。それは、小さく、大きな笑顔の種。



より良い世界へ、一歩ずつ

中央区立佃中学校 三年

長尾 桜

私の将来の夢は、地球や世界のために貢献することです。中学三年生で進路選択を迫られている私は、どうしたら地球や世界に貢献できるのかと、毎日のように考えています。そこで私が人生の手本としたと思った、伝説のスピーチがあります。それは一九九二年にブラジルで行われた国連地球環境サミットで、カナダの環境問題活動家であるセヴァン・カリス・スズキさんのスピーチです。彼女は十二歳の時、世界を変えるため、カナダの十二歳から十三歳の子供たちの集まりに入り、ECO（子ども環境運動）を代表して大勢の大人の前でスピーチをしました。

彼女のスピーチで有名な部分であり、道徳の教科書に掲載された文章があります。

「オゾン層に空いた穴をどうやってふさぐのか、あなたは知らないでしょう。死んだ川にどうやってサケを呼び戻すのか、あなたは知らないでしょう。絶滅した動物をどうやって生き返らせるのか、あなたは知らないでしょう。そして、今や砂漠となってしまった場所にどうやって森をよみがえらせるのか、あなたは知らないでしょう。」

十二歳という年齢であるのにも関わらず、環境問題を大人

相手に的確に指摘しています。私だったら、もっとオブラートに包むでしょう。ですが、物怖じしない言い方がとても胸に刺さりました。

また、彼女はこう話しました。

「私は怒っています。でも、自分を見失ってはいません。私はこわい。でも、自分の気持ちを世界中に伝えることを、私は恐れません。私の国での無駄遣いは大変なものです。それでも、物を浪費し続ける北の国々は、南の国々と富を分かち合おうとはしません。物があふれているのに、私たちは自分の富を、そのほんの少しでも手放すのが怖いのです。」

ドキリしました。私も色々な物を浪費する人間の一人なのではないか、と。毎年、誕生日やクリスマスが来たらプレゼントをオーダーし、流行している文房具を買いに行ったり、好きな服を買ってもらったり。そして、使わなくなった物は捨てる。考えてみると、私も立派なお金と物の浪費者だったということに気が付きました。そんな身分で、地球と世界に貢献すると言っていた自分が、恥ずかしくなりました。この言葉は、私の甘い考えを正してくれるきっかけとなりました。

また彼女は、ブラジルで家のないストリートチルドレンが話してくれたことについて、述べています。

「ストリートチルドレンの一人が私たちにこう言いました。僕が金持ちになったら、家のない子すべてに、食べ物と、着るものと、薬と、住む場所と、愛情とやさしさをあげるのに」家も何もない一人の子どもが、分かち合うことを考えているのに、すべてを持っている私たちがこんなに欲が深いのは、いったいどうしてなのでしょう。」

今まで私は過不足なくこの十四年間を過ごしてきました。不自由と思ったことは、一度もありません。やりたいと思うことは、何でもできる環境にありました。今、苦しんでいる人々が世界中にはたくさんいるということを知っているのにも関わらず、ほぼ何も行動を起こせませんでした。やったのは、学校で実施されるユニセフ募金や、赤い羽根共同募金に参加したくらいです。苦しんでいる人々について、テレビで放送されているのを見ても、心が痛むくらいで、行動を起こせませんでした。だから、これからはもっとそのような活動について、真剣に考えていきたいと思っています。

そして彼女は最後に、彼女の父がくれた言葉をみんなに伝えています。

「父はいつも私に『不言実行、つまり、何を言うかではなく、何をするかでその人の値打ちが決まる』と言います。しかし、あなたたち大人がしていることのせいで、私は泣いています。あなたたちはいつも私たちを愛していると言います。しかし、言わせてください。もしその言葉が本当なら、どうか、本当だということを実行で示してください。」

口先だけで行動が伴わなければ意味がないと、私も大人によく言われます。私の、地球と世界に貢献するという夢も、言っているだけではいけません。実際に行動に移すことは、とても難しいことも分かっています。だからこそ私は、強い意志と覚悟で臨もうと思うのです。何事にも強い気持ちで取り組み、不言実行できるように頑張らなくてはと、強く感じました。

私は今まで、幸せな生活をしている人々の後ろで苦しんでいた多くの人達から、目を背けていたような気がします。ですが、

これからは、絶対に顔を背けたくない、そう思っています。地球と世界のために本格的に活動できるのは、大人になってからです。でも、今できることを自分の力で探し出し、微力ながらも頑張っていくことはできるはずです。

今回は、地球や世界が抱えている問題の一つを挙げましたが、まだまだ残っている問題の数は、私の想像をはるかに上回っていると思います。全ての問題を解決できる日はなかなか来ないでしょう。ですが、一つずつ解決していくことでいいと思います。結果的に、その地道な努力が、より良い世界へつながっていくわけですから、とても素晴らしいことだと思っています。私が死ぬ時に、私はこんなことをした、と胸を張って言えるようになるために、今から頑張って勉強しようと思っています。どんな困難な課題が私に降りかかって来ても、決してめげない、強い心を持つとうと思っています。一歩ずつ、地球と世界のために力強く歩んでいこうと思っています。



自分自身への気付き

北区立赤羽岩淵中学校 三年

佐 竹 満里菜

中学三年生になり、高校やこれからの進路について考えなくてはいけない年になった。今まで「受験」について考えることを避けてきた私は中学三年生になっても今年が受験期だという自覚なんてなかった。

そんなある日、塾の友達と高校の話になった。私は周りの友達も自分と同じ考え方だと思っていたが、ほとんどの友達は志望校が決まっていた。その時、自分が今年受験生で、将来のことを考えなくてはいけないという自覚を持ったと共に焦りを感じた。しかし、将来なりたいたい夢もなく、夢中になれることも見つかっていなかった。ただただ焦りと、将来への不安が募ってきた。毎日、自問自答を繰り返し、将来のことについて考えたが、さっぱり思い浮かばなかった。その中でも漠然と、将来は自分に合った仕事で、人のために働きたい。という思いがあった。また、小さい頃から色々な将来の夢を持っていたが、どれも「これだ」というものはみつけれなかった。そう考えると今決めたとしてもまた変わってしまうのではないかと毎日、悩んでいた。そして、何も考えがまとまらないまま学校がコロナウイルスの影響で休校になってしまった。

色々、悩んで、イライラしていた私は息ぬきをしようと、母

の手伝いで料理を始めた。最初に作った料理はカレーライスだ。母にレシピを教えてもらい一人で作ってみたが、初めての挑戦だったので、母が作る倍の時間がかかってしまった。にんじんやじゃがいもの大きさはバラバラで母みたいにはうまく作れなかったが、家族が「おいしい」と口々に言いながら食べてくれた。その時の家族の笑顔は忘れられない。それから、母が仕事の時の夕飯は私が作るようになった。冷蔵庫の中にある食材を確認し、自分でレシピを考えながら作った。家族の笑顔を思い浮かべながら作るのは楽しかった。最初のころは、すごく時間がかかっていたがだんだん短時間で作れるようになって、包丁がうまく使えるようになった。最初はうまくできなかったことができるようになる喜びや家族が「おいしい」と食べてくれることのうれしさを、料理を通して学ぶことができた。また、料理をすることへの関心から、食材にも興味を持つようになった。家庭科で学んだことを基にして、食材の成分を調べていくと、おもしろく、初めて知ることが多かった。また、自分の食生活も見直せるようになり、かたよりのないバランスのよい食事が取れるようになった。

ある日、母と料理をしていた時に私がぼそっと「栄養士になろうかな。」と言ってみた。私は、冗談のつもりで言ったのだが、母は「いいと思う。調べてみたら？」と言ってくれた。父や妹も後押しをしてくれたので、少し栄養士について調べてみることにした。冗談のつもりだったのですが、栄養士がどういう仕事かわしくは知らなかった。調べてみると、栄養士には、「栄養士」と「管理栄養士」の二つがあり、仕事の内容は少し異なっているが両方共、「人の健康を守る」ということが分かった。その中

でも管理栄養士は、国家資格であり、病気で患っている方や高齢で食事がとりづらくなっている方、健康な方など一人一人に合わせて専門的な知識と技術をもって栄養指導や給食管理を行うことを知った。この仕事は、人のために働いて、私の興味のある「食」に関する勉強ができるため、自分に合っているのではないかと思った。

中二の終わりから中三にかけて、長い休校に入ったことで、受験生という自覚が持てないでいたが、休校によってできた時間で、今まで考えていると思っていただけの自分に気付いた。今までも料理をしてきたが、興味をもち、一人で考えて行ったことはなかった。今回じっくりと自分自身に向き合い取り組むことで、自分が好きなことなのかを考えることができ、将来の目標につながったのではないかと思う。

漠然としていた目標が少し具体的になったことで、これからの進路についても考えることができ、一つ壁を乗り越えられたように感じている。まず今見つけた目標に向かって頑張りたいと思う。ただ、今後、他に興味をもつこともあるかもしれない。今回、経験したように、興味をもったことで自分が好きなことなのか、やりたいことなのかを真剣に考え、自分自身と向き合っていくことが大切であると考えている。そのために、何ごとにも興味をもち、周りを見て行動するよう努めていきたい。



夢のきっかけ

北区立赤羽岩淵中学校 三年

高橋 理那

何気ない日常の中、ふと自分の将来のことを考えるときがある。想像力を働かせ、十年後の自分を想像していると何だか楽しくなってくる。だがそれはただの理想に過ぎない。いざ誰かに「将来は何になりたい?」と聞かれると、「もつと現実を見なさい」と言われることが怖くて、結局何も答えられず、とっさに自分はまだなりたいたいと思っている職業はない、とごまかそうとしてしまう。いつも自分の夢に自信を持てない自分が情けなく思えた。

周りの人たちはみんなしつかりとした夢があるのに、自分だけいつまでたっても夢ができなくて、自分に合うと思った夢を見つけてもいつも最後は「私なんかには無理か。」と思ってあきらめてしまう。

私は優柔不断のまま、気が付いたらみんなそれぞれ進路を考え始める時期になっていた。自分だけ何もできないままで、何だか虚しく寂しい気持ちになった。それぞれキラキラしてる、色んな夢を持つみんなが羨ましく思えた。

そんなとき、「職場体験のお知らせ」が配られた。今は特にやってみたい職業はないし、どうせ今までと同じくあきらめることになると思うと、全く興味を持てる気がしなかった。体

験できる職業がたくさんある中、どれを選ぼうと悩んでいたとき、丁度、一枠分空いているクリーニング店が目に残った。「これにしよう。」と横にチェックを付けた。事前学習では、クリーニング店の仕事について調べたり、履歴書を書いたりした。

そして遂にやってきた職場体験一日目。最初働いてみると、何だかやること全てが新鮮に思えて、まるで子どものような、わくわくする気分になって、不思議と楽しく感じた。黙々と頼まれたことをひたすらこなしていると、「分からないことあったらなんでも聞いてね。」と言われたので、やり方を聞いたものの、私は一回で理解できなかった。一人で困っていたら、店長が察してくれたのか、「誰だって最初はうまくいかないものだよ、何回でも質問して良いんだから遠慮する必要なんてないよ」と言ってくれた。とても小さな一言だったけど私にとって嬉しいもので、「優しい人だな」と思った。お昼休みするとき、店長にいきなり「将来の夢とかある？」と聞かれ、私は驚いてとっさに「特にないです。」と答えたが、動揺が隠しきれなかったのか、店長は「本当に？」と聞き返してきた。

私は自分の夢ができないという悩みを店長に話した。店長は微笑んで、「私も君と同じだったよ。」と何かを思い出すように話し始めた。「私も昔は実は将来の夢がなかなか決まらなくて、それがずっと悩みだった。昔はマラソンに挑戦して、完走したり、ボクシングをやったり、ボランテニア活動にも参加した。色んなことにチャレンジしてきたけど、一つも真剣になれず、全部ただの趣味になってしまって、結局は友達に昔家庭科が得意だったという理由ですすめられたことがきっかけで今まで

やってきた数々のこととは全く関係のないクリーニング店の店長になった。今でもクリーニングのことは勉強し続けているんだ。」そう言いながら、引き出しから一冊のボロボロなノートを出して私に渡した。私はそっとページをめくると破けそうな紙には「シミ抜きの基本」というタイトルの下に字や絵がみっちり書き込まれていた。「大人になってからも失敗することはある、勉強だってし続けないといけない場合がある。夢がなくても全然焦ることはない、夢なんてつくろうと思ってるものじゃない、何かがきっかけでできるものだと私は思う。だから無理に急いちゃうとしくなくて良いんだよ、君は君のペースで見つければ良い、君は英語と中国語が得意みたいだし。」何で知ってるのかはすぐに分かった。「履歴書見てくれたんだ。」と思った。店長の言った言葉を聞いて私の中で不思議と何かを悟ったような気がした。

その日の仕事を終えて家に帰ってから私はずっとこの言葉について考えた。あとの二日間はあるという間に過ぎた。

職場体験が終わったときの達成感と店長が言ったあの言葉は今でも鮮明におぼえている。この三日間は私の人生にとって大切な、忘れられない良い経験になった。私は色んなことに挑戦していききたい、さらにその中で自分のペースで自分に合う夢を見つきたい。

いつか自信を持って、みんなの前で自分の夢を言えるようになることを目標に。



将来の夢

北区立赤羽岩淵中学校 三年

三 浦 日向子

私の将来の夢は、獣医師になることだ。

数年前、私たち家族は、祖母が亡くなった時、祖母が飼っていた猫を引き取った。その猫は重い腎臓病だった。もう長くは生きられないだろうと、祖母の家の近くの獣医師に言われていた。しかし、私の近所の獣医師は、最善をつくせば結構長く生ることができると言ってくれた。そして、猫が一番いい状態でいられるように、ありとあらゆる方法で治療してくれた。私はまだ小さかったため、あまりクリニックに行くことはなかったが、家に帰ってきた猫が元気になっている様子を見ると感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。先生が頑張ってくれたおかげで、その猫は言われていたよりも二年も長く生きることができた。その先生に憧れて、私は獣医師になりたいという気持ちが生まれた。先生がしてくださったように、私も真摯に病気の動物に向き合い、一つでも多くの命を救いたいと思った。

この猫が死んでしまった時に、命には限りがあることを痛感した。これは仕方のないことだ。しかし、自分が愛していたペットの死と向き合うのは本当に辛い。だから、少しでも動物が元気で幸せに長生きできるようにならないか、と思うようになった。獣医師になったら、たくさん動物を助けると同時に、動

物の延命についても考えていきたい。

中学一年生の時の夏休みに、身近な仕事をしている人にインタビューをして、新聞にまとめるという宿題が出た。私は、迷わず私たちの猫を助けてくれた獣医師の先生に、インタビューをすることに決めた。

当日、私は先生から色々大切なことを学んだ。まず、仕事のやりがいについてだ。先生が獣医師をやっていてよかったと思う瞬間は治療した動物が元気になったときだと言う。飼い主さんも笑顔になり、この仕事をやっていて本当に良かったと思うそうだ。また、人に言われてするのはなく、自分で考えて行動することも、獣医師として必要なことであると話してくれた。

もちろん、獣医師の仕事は楽しい事ばかりではない。獣医業界でも医療技術は、日進月歩である。そのため、国家試験を通り獣医師になった後も、勉強を続けなければならない。一生勉強の必要な仕事である。

また、すべての動物の命を救えるわけではないことへの覚悟があるだろう。動物の死と向き合うことは辛い。獣医師にとっでは一番悔しいことだと思う。私は、可愛くて心の支えになってくれる動物が大好きだ。動物の死に毎日の仕事の中で頻繁に向き合わなければならぬことを考えると、なりたくないという気持ちと並行して、ちゃんと向き合えるのかという不安もある。だが、動物を一生懸命助ける獣医師の姿を思い出すと、その辛さを絶対に克服してみせると決心している。

私は、獣医師になるために必要なことはたくさんあると思う。もちろん勉強も大切だが、それだけではないと思う。飼

主さんと的確なコミュニケーションをとる能力や、最善の治療法を検討するための広い視野、長時間にわたる手術をするための体力などだ。

私は、生徒会活動をしている。活動の中で、まだ一回も話したことの無い生徒と話したり、記念式典の時に、来賓の方々を控室までご案内したりする。まだ上手にできるとは言えないが、その折々にコミュニケーション能力が鍛えられていると感じる。また、何か生徒会主催で行事を進めなければならない場合、全体を見て、優先順位を決めて行動しなければならぬ。広い視野を持つ事が大切になってくる。これらのことを意識して生徒会に入ったわけではないが、生徒会での活動は、私の将来の夢に大きなプラスになっている気がする。

私は、生まれつき体力がなく、何か行事があるたびにすぐにばててしまっていた。しかし、獣医師には絶対に体力が必要だ。だからこれからは、適度な運動をして体力をつけていきたい。また食事の栄養バランスに気を配り、好きな甘いものも控えていきたいと思う。

獣医師になるのは難しい。獣医師になるための大学は偏差値が高いし、そもそも数が少なく、狭き門である。必死にがんばっても大学に入れない人もいる。だけど、私はこの夢を諦めようとは思わない。これから勉強や運動、学校での様々な活動に全力で取り組み、努力を重ねていきたいと考えている。そして今度は、自分の手で、たくさん動物たちの命を救えるようになりたいと思う。



苦手だった事を大好きな事に

北区立稲付中学校 一年

滝沢 佳央

私が小学六年生の時、学校で展覧会が行われた。そこで私の裁縫の作品が展示され、区展、都展にも選ばれた。私はこの出来事により、人生の価値観が大きく変わった。

私はもともと家庭科が苦手で、先生から注意を受けても、真面目に聞こうとしなかった。もちろん成績は悪く、テストも分からない所だらけだった。転機が訪れたのは、六年生の二学期頃で、展覧会の為に一人一つ、裁縫の作品を作ると聞いた時だった。また、出来によつては、上野の美術館で展示されることもあるらしい。私は、小さい頃から美術館に行くのが好きで、自分の作品が展示されるのが、私の憧れであり、目標でもあった。私は、上野の美術館に飾られる事を目標として、精一杯、作品を作ろうと思った。

初めは、デザインを考えた。私は、リバーシブルで使えるバッグを作りたいかったので、裏と表のバランスを考え、デザインを練った。しかし、思い通りの色と柄の布が見つからず、結局、布を買ってから寸法などを決めるようにした。すると、全体のバランスを実際に見てイメージ出来たので、とても早くデザインを作ることが出来た。次の授業では、布に印をつけ、布を断った。いままでだったら、いちいちどこに印をつけたらよ

いのかと迷い、適当な位置につけ、断つ時は、もう一度確認してからだった。そのために時間がかかり、家で苦勞しながらやるが多かった。しかし今回は、始めから丁寧に印をつけたので、早く、きれいに断つことができた。とても早く終わったので、先生にも褒められ、いつも丁寧に作っていた方が良かったのだと、気付くことが出来た。次の授業ではいいよ、ミシンが始まり、私の苦手なミシンの扱いを克服しようとした。しかし、下糸の準備に時間が掛かってしまい作業時間が三十分程になってしまった。結局初日は、バッグに付けるポケットの作成で終了してしまった。しかし、ポケットの中と外の両方を作ることが出来、普段よりは、早いペースで進めることが出来たと思う。次の日、ミシンの準備はスムーズに終わったものの、ポケットを付ける時に縫ってはいけない所も縫ってしまい、それをほどくので時間が終わってしまった。今では笑話にしているくらいだが、当時の私は、周りで終わっている人もいる中、糸をほどくというのは、惨めで、時間内に終わるのかという不安がとても多く、泣きたい気持ちだった。しかし、友達が励ましてくれたり、同情してくれたりし、勇気が出て、頑張ろうという気持ちになれた。そして、次の授業で完成することができ、とても嬉しくなった。また、最後にポケットにレースを付け、一気に華やかなバッグになった。題名を、「お出かけの日に持つリバーシブルバッグ」と決め、余った時間で、ブックカバーも作った。今までの私だったら考えられない事だ。細部の縫い目を丁寧に仕上げ、紐も糸で二重に付け、頑丈になるように拘った。今までで、一番良い作品が出来たと思った。それと同時に、裁縫が楽しいと感じられ、また作品を作りたい、という心境に

至ることが出来、裁縫を好きになることも出来た。

学校で展覧会が行われた。全生徒に作品を見てもらうことが出来、誇らしい気分だった。また、友達もたくさん褒めてくれ、丁寧に作るのは、私にとって得以外の何者でもないと感じかされた。そして、先生から区展への出品を聞かされた時は、とても嬉しく、目標に一步近づけたという喜びも大きかった。区展では、違う学校の人の作品も見られ、刺激を受けた。そして、一ヶ月経ったある日、皆の前で都展に選ばれた事を報告され、達成感は、計り知れない程だった。祖父と祖母、そして父と母と妹二人も観に来てくれ、とても忘れられない、すばらしい日となった。

私は今、何事にも積極的に取り組み、前向きな気持ちでいることを意識して、日々を過ごしている。そのきっかけが、この裁縫での出来事だ。今では、家庭科が大好きになり、学校で家庭科係も務めている。私はこれから、苦手な事があっても、目標を見つけ、しっかりと克服していき、全ての事において、楽しいと思えるよう、正しく行動していきたい。



授業を通して

葛飾区立堀切中学校 三年

五十嵐 蓮

僕は、小さい頃から物を作るのが好きだったのでよくスーパーからダンボールをもらってきては、家でガチャガチャなどを作って遊んでいました。小学校では、いつも「図工」が楽しみで、僕はどちらかというと製作系が好きだったので、身近な物で何か作ったりする授業がとても好きでした。

中学生になり、新しく「技術・家庭」、「美術」という教科が「図工」と入れ替わりました。技術の授業では、紙ではなく木材などや電子機器が中心の授業と聞いていたのでとてもワクワクしていたのを今でも覚えています。初めて技術で作った作品は、「シャッター付き小物入れ」今まで作ったことがなかった実用性のある作品でした。今までとは違った製作でしたが、なんとか作り終えとても気に入って、今でも部屋においてあります。そして、僕は物を作ることは別に、「釣り」という大きな趣味を持っていました。釣りでは、ルアーという疑似餌を使う釣りがあります。そこでルアーは木材で作れるのではないかと考え調べてみると作れることが判明し、そこからルアー作りを始めました。初めは上手に作ることができなかったものの、回数を重ねるたびに技術が向上し最近やっと使うことができるような物になってきました。この自作ルアーで釣った魚は

限りなく人生で一番うれしい瞬間になるので、その瞬間のためにこれから頑張って製作していきたいです。そして、僕は二年生になり、技術の授業ではし作りを行いました。はしの製作では基本やすりを使ったので、ルアー作りで培ったやすりの技術を生かし効率的に行うことができました。はしを完成させ、家に持ち帰りなんとなく机に置いておくと、その時丁度、家に来ていた祖父がもの珍らしそうにはしを手を取っていました。僕はそれに気づき、

「それ、技術の授業で作ったの」

と言いました。それに対し祖父は

「へえーこれは、すごいね。」

と、褒めてくれました。僕はなんだかその一言がとてもうれしく感じ、

「それ、あげようか？」

と、言ってみました。すると祖父は嬉しそうにそれを持って帰りました。そして、次の週祖父の家を訪ねたのですが、その日の夜食の時、祖父が僕の作ったはしを使っていたのです。

今まで僕は物を作った後、だいたい自分ですべてを使い飽きたらそれを捨てるを繰り返し他人にあげることはほとんどありませんでした。なので初めは、使っている様子を不思議に眺めていましたが、ふと、祖父は僕の前だから気を使ってそのはしを使ってくれているのではないかと考え、祖父におそろおそろ聞いてみました。すると祖父は嘘をつく様子もなく、「ああこれすごい使い心地が良いよ。」

と言ってくれ、さらに、

「毎日使っているよ。」

とまで言ってくれました。そこで僕は、今まで物作りでは感じたことのない、人にあげる喜びを知りました。このときがともうれしく僕は手も器用な方だったので、家にあったミシンを使い祖母と祖父の結婚記念日に、おそろいのクッションを作りプレゼントしました。このときも祖父は喜んでくれ、祖母もとでも喜んでくれたので、とてもうれしかったです。三年生の授業では、現在LEDあんどんを作っていますが、今までにはなかった木材と電子機器の組み合わせで、製作には今まで使ったことのない道具など新しい発見がたくさんありとても楽しいです。

中学生での技術の勉強は、今までなかった僕の製作の視野を広げ、そこからルアー作りや、人にものをあげる喜びなどたくさんのことを学ぶことができました。僕は将来、こういった製作系の職業につきたいと思っています。高校は製作系の職業につくための勉強ができる東京都立工芸高等学校を受験しようと考えています。今まで培ってきた技術力などを活かし、これからの人生を歩んでいきたいと思っています。



職場体験で学んだこと

葛飾区立堀切中学校 三年

梅林 めぐみ

中学二年生のときに職場体験学習というものがありました。そこで、私が第一希望で選んだ職場が「保育園」です。なぜかというと、私は小さい子のお世話と一緒に遊ぶことが大好きだからです。また、小さい子の命を守る大変さや責任の大きさをこの職場体験を通して学びたいと思い強く希望しました。その結果、A保育園を体験させてもらうことができたのでとても嬉しかったです。そして、他の保育園ではあまり〇才〇才の子を担当させないそうですが、今回特別に、私は〇才〇才の子を担当するという貴重な体験をさせてもらいました。楽しみと不安が半分半分でしたが、その三日間で学んだことを伝えたいと思います。

私はこの職場体験を通して学んだことが四つありました。

まず一つ目は「その子の目線・気持ちになること」です。相手が〇才〇才ですから、私達との年齢差はもちろん大きいです。私達が普段通りに小さい子に話しかけても何も伝わりません。そこで、目線を少し下げてあげて、その子と同じ立場になったつもりで話すことで距離がぐっと縮まります。その子の気持ちになることはとても難しいことですが、そこで雑に対応してしまうと小さい子にはすぐその感情が伝わってしまうので、頭

でその子の気持ちを考えることを一番意識しました。

次に二つ目は「言葉使いと礼儀」です。周りの人達が良いか悪いかだけでその子にも影響してしまいます。また、小さい子は大人の行動をよく見ていますから尚更です。汚い言葉や過激な言葉は絶対に使ってはいけません。小さい子達にとって大切だと思いうる礼儀などはくり返し言っただけで、ジェスチャーを使ってよりわかりやすく伝えてあげたりします。そうしたことで、小さい子達も楽しんで真似をしてくれました。

そして三つ目は「一人一人の性格を理解すること」です。小さい子達を寝かせるときや散歩に行くとき、「○○くんは寝つきが悪いからトントントンしてあげて」「○○ちゃんは体力あるから一緒に歩いてくれる？」などと、先生方がその子についての情報をたくさん教えてくれました。これは保育園に限らず、学校の先生はこの倍の人数の生徒を受け持つわけですから本当に大変なんだと改めて実感しました。また、遊び方もそれぞれ違いました。例えば、元気な子には少し追いかけて回したり、踊ったり。大人しい子には本を読んであげたり、一人の時間をあげたりと、目の前で体験しているからこそわかる先生方の工夫がたくさん感じられてすごい感心しました。

最後に四つ目は「小さい子達の笑顔が力になること」です。みんな好奇心や探求心が旺盛で見守るだけでも大変です。休憩の時間もみんなが寝ている間だけ。一日だけでも結構体力が奪われました。しかし、休憩の時間に先生方に話を伺うと「大変だけど、この子達の笑顔が原動力になるの」と教えてくださいました。その通りだと私でもすぐに共感することができました。三日間という短い時間ですが、小さい子達の笑顔をもらっ

たことで力になり、最後まで一生懸命やることができました。この職場体験を通して学んだことが他にもたくさんありました。先生方も優しく、小さい子達もかわいくて本当に楽しかったです。

私はこの体験をきっかけに保育士や介護士のような人の一生を支える人になりたいと思うようになりました。もちろん、その人の一生をサポートすることは簡単なことではありません。大変なことが多く、相手からの感謝をもらったら「やって良かったな」と感じられるかもしれません。このような人のために働く、素敵な人になれるように頑張りたいです。



職場体験で気づいた仕事に対する価値観

葛飾区立堀切中学校 三年

古 晒 真 緒

私は一年前病院に職場体験に行きました。将来の夢がまだ定まっていらない私にとってこの体験は、とても貴重なものでした。三日間という短い期間ではありましたが、私は三つのことを学ぶことができました。

一つ目は、働くことの大変さとその先の充実感です。

私は職場の方に、薬の調合や車椅子の使い方、患者用ベットのセットの仕方など、いくつものことを教えていただきました。しかしその中でも、実際に患者さんと話し、その方のお世話をすることが一番大変でした。病院にはたくさんの患者がいます。中には、少し物忘れのある患者さんもいました。しかしその方とこんな体験をしました。二日目、廊下を歩いていたらその患者さんとすれ違ったので、前日と同じように話しかけました。するとその方は「ああ、真緒ちゃん。」と私の名前を呼んでくれたのです。私は、名前を覚えていてくれたことにとても心優しく思いました。そのあと、お昼ご飯をその方に配って回ったときは、「今日もありがとう。」と優しい声をかけてくださりました。そこから、大変な仕事ほどこちゃんと続けると大きな幸福感や充実感を味わうことができるということに気づきました。

二つ目は、仲間がいることの大切さです。

私は同じ職場体験所に、二人のクラスメイトと一緒にきました。その子たちはもちろん、職場体験においての仲間です。しかしそれに加えて、病院の看護師さんや事務の方、薬剤師さんなどとも連帯感を深めることができたのです。私たちが行う作業ごとにそれに特化した人と共に仕事ができるので、多くの人と関わることができました。その方々一人一人が、仕事内容を優しく、わからない事は詳しく教えてくださりました。中には歳も近く、より近い距離で話してくれる人もいました。この三日間をより楽しいものにしてくれたのは、こういった仕事をするうえで仲間に恵まれたからだだと思います。日々の学校生活や部活動でも感じたことではありますが、改めて仲間の存在の大切さを学びました。

三つ目は、支える人の必要性です。

職場体験で、とても印象に残っている出来事があります。脳梗塞の患者さんである、Aさんとの出来事です。初日、Bさんは、電流を直接筋肉に流して手を動かすのでやっとなった感じでした。私たちはリハビリをする様子を見ながら、少しでも助力になればと思いエールを送っていました。体験三日目、再びAさんのリハビリの様子を見にいきました。すると機械を使わなくても手を動かせるようになっていたのです。Aさんに話を聞くと、「みんなに応援してもらったから、リハビリももっと頑張ろうって思ってる気が出ちゃって。」と教えてくれました。私はその人のやる気の源が自分たちだだと思うと、嬉しくたまりませんでした。支える人の存在は、想像以上に大きなものだと感じました。それと同時に、私自身も多くの人に支えて

もらっていて、そういった周りの人の必要性というのは絶大なものだということに気づきました。

私はこの三点を踏まえて、さらに自分の将来への考えを大まかに固めることができました。

現代には多くの職種があります。職場体験をする前は、将来はとりあえず事務員になればいい、というふうに考えていました。しかし体験を通し、世の中には多くの職種で溢れているのだから、自身の将来についてはよく考えなければならないという事に気づかされました。そしてさらに病院で働いてみて、人と人との関係の深い仕事というのは、どんな仕事よりも充実できるものではないかと感じました。医療のみではなく、保育士や教員なども同じです。だから私は将来、そういった人との関わりの深い仕事に就こうと思います。また、Aさんとの体験のように、誰かに感謝をしてもらえるように頑張ります。そして常に自分は誰かに支えてもらっているという意識を持ち、今度は自分が他の人にそれを返していきます。



受け取り手との関わり

葛飾区立四ツ木中学校 三年

佐藤史織

私は、小さいころから手芸や工作などのものづくりが好きでした。母が手芸をしている姿に興味をもち、その真似をして布を縫いあわせてみたり小物をつくったりしていました。家族が行った旅行先でも、ガラスづくりやアクセサリーづくりの体験があると真っ先に走って行って、やりたい、と両親にたのんでいたのがいい思い出です。今でもひまがあれば、色々なものをつくっています。

中学校に入ってから、技術・家庭科のような実技教科の学習が加わり、授業内でも、手芸をしたり、木を削ってはしをつくったりするようになりました。私にとってものづくりは大切な趣味だったので実技教科の授業は、楽しい時間でした。技術でつくった、コードや行灯は、あまり経験したことのない作業が多く、とまどいましたが、それも勉強になりました。

私がものづくりについて初めて深く考えたのは、家庭科の授業で地域ごとの伝統織物について学んだ時でした。今までは伝統的なものづくりに触れることが少なかったもので、地域ごとに異なった柄や色の美しい織物に、どのようにしてつくられているのか、という疑問をもちました。それから、伝統的なものづくりについて調べているうちに、工房で一つ一つ手作りされて

いるような工芸品などに興味をもつようになりました。

工房でのものづくりに興味をもち始めたころ、旅行先でガラス細工やコップをつくっている工房を見学しました。同じような種類のものはあっても、一つ一つが少しずつ違うガラスのコップから、つくり手のあたたかさを感じました。工場の機械でつくられたものよりも、人が真心をこめてつくったものにはぬくもりがあるということ、あらためて感じた瞬間でした。工房の品を売っている店をまわっていると楽しそうに商品をみているお客さん達がたくさんいました。心のこもった品物はそれだけ人を引きつけるんだな、と思っていると、お客さん達をみて、うれしそうな顔をしている工房の方を見つけました。その出来事から私は、ものづくりのつくり手の喜びは自分の作品を受け取った人がそれを良いと思ってくれることなのではないか、と考えるようになりました。

私自身も、そのような経験があります。つくったものを友人や親戚に渡すと喜んでくれて、あたたかい気持ちになりました。自分が心をこめてつくったものを相手が大切にしてくれている、と感じた時がものづくりの喜びなのだと思います。

以前テレビで観た、ねぶた師の北村麻子さんという方の話が強く印象に残っています。元々ねぶた師は男性社会で北村さんは史上初の女性ねぶた師の方です。女性初ということで周囲の偏見や、色々な困難があったけれど北村さんは負けずに努力していました。その努力もあって北村さんはねぶた祭りでのねぶた制作を手がけることができました。祭りでの作品はとても素敵なもので、私はたくさんの方の努力をしてきた北村さんを尊敬しています。ねぶた祭りの参加者もとても楽しそうでした。私が

北村さんの立場でも、その人達を見て大きな喜びを感じると思っています。自分の作品によって作品を見た人を楽しませることもまた、ものづくりの喜びなのだと思います。

ものづくりは、つくり手がいれば、それを受けとる人や使う人がいます。「ねぶた」などの作品や、美術館などに飾られている絵や彫刻にはそれを見て楽しむ人達があります。ものづくりには作品を通して作り手と受け取り手をつなぐ力があると私は思います。また、自分のために、ものづくりをしてそれを極めていくのもつくり手の喜びだと思います。私も手芸や工作をしている時、自分の上達を感じる瞬間はたまらなく喜びを感じます。自分のために極めていくのも喜びだと思いますが、私は、極める喜びと、受け取り手とのあたたかい関わりの上での喜びの両方を感じてこそ、心からものづくりを楽しむことができると思います。

今、私は中学三年生で将来のことも考えていかなければいけない時期です。昔からものづくりに関わる仕事にも興味がありました。もしこの先、そのような仕事に就く場合は、心からものづくりを楽しんでいけるようになります。



職場体験が教えてくれた私の夢

江戸川区立松江第四中学校 三年

内田 妃 咲

「将来、何になりたいですか」そう問われると、私は困ってしまいます。幼い頃の私なら、何も考えずにお花屋さんになりたいとか、先生になりたいだとか、たくさん夢を思い描いていたと思います。しかし、今になると本当になりたいものは何なのか分からなくなります。ですが、その考えを変えてくれた体験がありました。

私は中学二年生の時に、職場体験で幼稚園へ行かせて頂きました。普段から小さい子が好きだったので幼稚園での職場体験だと聞いた時はとても嬉しかったです。また、私が幼稚園生だった時は幼稚園の先生が好きで、将来は幼稚園の先生になりたいとも思っていました。しかし、小学校にあがると様々なことに興味を持ったので幼稚園の先生になりたいという夢をいつしか持たなくなりました。そして今や何になりたいのか分からなくなっていました。そんな時での職場体験では、年中さんの担当をさせて頂きました。その幼稚園の先生は私の通っていた幼稚園の先生よりも厳しく感じました。園児に叱る先生の姿を度々見ながらも、園児三十二人の笑顔や少しの成長を間近で感じながら職場体験の四日間を過ごしました。四日間の短

い期間で園児の成長を見られただけでなく自分自身も成長しているのを感じられました。また、職場体験をするにあたって、中学校でワークシートが配られました。あまり話さなかった園児が話しかけてくれた日、担当の先生がワークシートに「あまり話さない子が話してくれたのはきつと先生が優しく関わってくれたからです。お給食で食べるのが遅い子に声をかけてくれてありがとうございます。そういった姿はその子だけでなく、周りで見ている子も嬉しくなります。」と書いて下さいました。給食に関しては、あたりまえだと思ってしたことでした。そのような細かなことまでも見てくれる人がいるのだと気付きました。世の中の全てになくてもいいものなんてないのだと思いました。

普段、生活しているのにあたりまえでないことをあたりまえのようにやってくれる人がいるから私たちは充実して生活することができると感じます。職業もそうだったのだと思います。先生が園児に厳しくしていたのにも理由があり、ワークシートに最終日、このようなことも書いて下さいました。「子どもはかわいし、毎日面白い事が起こるし、私は先生になれて良かったと思います。が、三十二人を安全に保育するためにはたまには怒る事も必要です。すぐく心が痛みますが、「みんなが大好きだから先生は怒るんだよね？」と子ども達は言うてくれます」と書いて下さいました。厳しい裏にはそのような想いがあったのだと優しい気持ちになりました。幼稚園の先生はすてきな職業なんだと改めて思いました。また、誰かの役に立たない職業はないのだと思います。この職場体験で、私は直接的に人の役に立つことをしたいと思うようになりました。どの職業も役に立つものですが、その中

でも人と直接的に関わり、役に立ちたいです。役に立つと言っても職業に就いて役に立たなくても良いと思います。今からでも人の役に立つことはできるからです。誰かが落とした物を自分が拾ってあげる、それだけでも物を落とした人にとって、自分はその人の役に立っていると言えらると思います。様々な「役に立つ」があると思いますが役に立ったらその人は絶対に笑顔になると思っています。私はその笑顔を守りたいです。ですが職場体験から私は誰かを守ったり、誰かを想いやったり、誰かのためになるのは良いことばかりでなく、辛いこともあるのだということ学びました。先生のように園児を守りたいという想いがあるからこそ、心を痛ませながら怒らなくてはいけないのです。しかし、人のための言動は自分自身や誰かを幸せな気持ちにさせることができると思います。また、働くとは様々な意味があると思います。お金を稼ぐため、夢や目標を実現するためなど人によって違っても職場体験を通して思いました。働くことに意義を見出すのが大切なんだと思います。働くことは決して簡単なことでなく、大変なことだと思っています。それでも、自分のやっていることにやりがいを感じ、人を幸せにしようと思えるかどうかだと思います。私は職場体験で、働くことは人を幸せにするものだと学びました。

私は、職場体験で多くのことを学びました。普段、学校では教えてもらえないようなことを教わった気がします。今、「将来、何になりたいですか。」そう問われたら、人の役に立ち、笑顔と幸せを守ることができるようになりたいと胸を張って答えるでしょう。まだ、どのような職業に就きたいかは決まっています。ですが、今の私たち、中学生は無限の可能性があ

ると思います。ですから広い心で学習し、広い心で様々なことを受け止め、感じ、自分の可能性を見つけないです。そして自分が本当になりたい、頑張りたいと思える職業に就き、人の役に立ち、笑顔と幸せを守りたいです。さらに、笑顔と幸せを増やしていきたいです。

自分は何をしたいのか

江戸川区立松江第五中学校 三年

小川 恵加

去年学校で、何の為に働くのか、という授業があった。その時私は真っ先にお金の為だと思った。周りの人達は「自分を成長させる為」、「達成感を得る為」、「趣味を生かす為」など様々な意見だった。そんな中「人の役に立つ為」という意見が出された。私は正直、その意見を理解することができなかった。なぜなら働くとは結局、自分がやりたいことや自分がやりやすいことに収まり、周りの人はどうしても二の次になってしまうものだからだ。また、人の為に働くならば自分のしたことが制限されてしまうのではないか。人の為に働きたい人がいないとは思わないが、大多数は自分の為に働いていると私は思う。

こんなことを思いながら、私は今年の一月に職業体験に行った。私が一番学びたかったことは、授業で疑問をもっていた「職業において人の役に立つとはどういうことなのか」だ。

幸運なことに体験先が接客業の美容院だった為、学ぶのに絶好の機会だった。美容院に入った時、お店の人達がいらっしやいませと元気に迎え入れてくれた。その姿はとても輝いていて、自然に緊張がほぐれた。その時、私も笑顔で接客をしたら、お客様に喜んでもらえるのではと態度から学ばせてもらった。仕事にとりかかる前に、担当の方は心得を教えてくださいました。それは、どんな時でもお客様のことを一番に考えるという内容だった。楽しそうな雰囲気ながらも、担当の方はとても真剣なように感じた。しかしその時の私にはまだ理解ができなかった。なぜこんなにもお客様のことを考えるのだろうか。お客様に対しての態度はわきまえているつもりだった。だからこそ、これ以上は何をすることが必要なかがわからなかった。そこで私は、担当の方を観察してみることにした。

まず担当の方達は、お客様を笑顔で迎えていた。私が感じたことから、これは相手を安心させたり、快く過ごしてもらう為だと思われる。次に接客の時、年代等に合わせて口調を変えていた。この時私は、敬語を使うことだけが正しいわけでは無い、ということに気がついた。例えばお客様が子どもだった時、敬語を使うことが間違いなわけではない。しかし担当の方は年齢を瞬時に判断し、親しみのある言葉を使うのだろう。もし私が客側ならば、自分を気にかけてくれるのだと思いきになる。このように人に寄り添うことは、相手のことを思っていないだけでできないのだ。次に、話すことだけでどれだけ相手を知ることができるのかを学んだ。私は仕事をしながらお客様と担当の方の会話を聞いていた。天気の話や最近のニュースなど、決して美容院に関係のある話ではないけれど、とても盛

り上がっていた。そして担当の方は見るからにお客様との距離が近くなっていた。たわいない会話が人と人をつなげているのを目の当たりにし、私はとても驚いた。髪を切ることがメイソンの仕事なのに、話を聞いたりすることをまるで当たり前のようにこなしていて、本当にお客様のことを想っているのだと感じた。

休憩時間の時、どうしてそんなにもお客様のことを大切にするのかと聞いてみた。すると担当の方達は「お客様に喜んでもらうことで更に頑張れるからだよ。」と当たり前のように言い切った。また、「この仕事が好きだから、自分の力でお客様を綺麗にしてあげられるのが楽しい嬉しいんだ。」と話してくれた。確かにその時の担当の方達は笑顔であふれていて、美容師になるまでの苦しささえも感じさせないほどだった。つまり担当の方達は、自分の為に働き、その力を使って人の役に立っているということだ。自分と他人を両立して考えられることに、私はとても憧れた。しかし担当の方は、そんなに難しくなはいと思っっているようだった。私はなぜなのかわからなかった。何だっって両立することは難しい。その時担当の方は「自分の好きなことを進めていたら、成り行きで人の役に立っていたんだよ。だから人の役に立ちたいなら、自分が好きなことじゃないといけないと思うな」と言った。私はこの考えにとっても納得した。「自分がしたいこと」が欠けていればそれはただの「作業」であり、いつか苦しくなってしまう。だから両立をする為には、「自分が何をしたいのか」について見つめ直す必要があると思う。

そして私は職業体験を終えた。沢山のことを学び、私のもつ



ていた疑問は消えた。学ぶ前の考えと真逆の発想で驚いたが、私はどの意見にも納得した。したがって授業のときに出てきた意見は全て合っているのだと思う。働く理由は人それぞれだが、大半は「趣味を生かすことによって自分を成長させ、人の役に立つことを達成感につなげる」為ではないか。少なくとも私は今回の職業体験を通してそう思った。だから働くことで周りの人が二の次になることはないとは今では考える。

私は職業体験を通して、自分を成長させることができたと思う。今回学んだことは仕事だけに限られる内容ではない。高校へと進学してからも、必ず関係してくる。いつだろうと自分が好きなことで人の役に立つことは、どちら側にとっても素晴らしいことだ。またそのことを学べたのは、私の人生において本当にプラスになったと思う。これからは学んだことを更に生かし、自分も他人も両立して考えられるような人になりたい。

高等学校の部 最優秀賞

生命（いのち）と個性

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年

武田 博 乃

私は時折、首から血を流したまま「助けて」と私の目を見つめる鶏の夢を見る。そして、隣の家が飼っている鶏の鳴き声で目を覚ます。こんな日は目覚めが悪い。でもこれは、私が生きていく中で絶対に意味のあることだと思っている。

私の将来の夢は東京都の農業科教員になることだ。それは、農業科の先生に「あなたは教員になったら？」と言われたことがきっかけだった。しかし、その時には現実的なことではないと思い、真剣に考えてはいなかった。「私は農業科の教員になる！」そう強く思ったのは、高校二年生の、と畜実習の授業を受けたときからだった。

本校食品科では、二年生の二学期に総合実習の一環として、と畜実習の授業が行われる。私はこの授業で、『生命（いのち）』と向き合うとはどういうことなのかを心の底から思い知った。授業前日からソワソワとした気持ちがおさまらなかった。当日の授業は三班に分かれて実施された。私は二班だった。既に実習室の床は血に染まっていた。そして、小さく「コッコ、コ」と鳴く鶏の鳴き声の実習室に響いていた。実習が始まった。鶏

を押さえつけ、先生が鶏の頸動脈を切った。その時私は、鶏と目があった気がした。それと同時に「助けて。」そんな声が聞こえた気がした。その光景を今でも鮮明に覚えている。それから少し鶏は暴れたが、そのまま頭を下にして放血器に入れられ、私は血が抜けるのを待った。放血器で暴れる鶏を見て、とても大きなショックを受けた。私は初めて、目の前で『生命（いのち）』が奪われるところを目にした。私にはこれから先の授業の記憶が無い。血が流れていく実習室の床、先生の手に付いた鶏の血。とても衝撃的だった。忘れたくても忘れられない。いつまで経ってもその記憶が消えてくれない。そして実習が終わり、控室に戻った。そこには一部の生徒のにぎやかな話し声が響いていた。それを見た先生は、とても苦しそうな声で、「私の気持ちも考えてくれ。」「こんなことなら君たちに切って欲しかった。」と言った。先生はその日、計三羽の鶏の首をナイフで切っていた。

この日の夜、私は血まみれの実習室と首から血を流している鶏が私の目を見て、ずっとずっと「助けて！助けて。」と訴えてくる夢を見た。それから何日か、私はこの夢を見続けた。それでも私は「食卓に並ぶお肉から絶対に逃げてはいけない。」そう強く思った。私が食べられなくなれば、毎日と畜されていく家畜たちは報われない気がした。私はこの日から何かが変わった。『生命（いのち）』と向き合うとはこういうことなのか。改めて強く感じた。私たち人間は、できるだけ苦しめずに、一息にとどめを刺さなくてはいけない。少しでも躊躇すれば急所を外れ、家畜たちは痛みにもがき暴れまわる。苦しまないように、そして無駄をつくらない。それが、家畜の『生命（いのち）』

をいただく私たち人間が、唯一できる精一杯のことだと私は思う。

私たち人間は生きていくために食事をする。そのような中で、沢山の『生命（いのち）』の『生と死』に向き合わなくてはいけないのだ。それを多くの人に知ってもらい、『生命（いのち）』の大切さを改めて感じてもらえるように、私は農業科の教員になり、多くの人に発信していきたい。

もう一つ、私が教員になりたいと思った理由がある。それは、一人一人の『個性』を「大切」に、「理解」してくれる先生と出会ったことだ。私には苦手なことが多い。何度やっても上手くいかず、親や周りの人には「そういうところが足りないんだ」「そういうところが駄目なんだよ。」と言われることばかりだった。それを気にしていた私は、「完璧でなくてはいけない。」そう思っていた。そのような中、私の苦手なことやミスを、その先生は「あなたらしいね。」と言ってくれた。何度も「駄目だ」「足りない」「そう言われてきた私の苦手なことを」「私の『個性』だ。」と、そう言ってもらえた気がした。その時、私の中にあった苦しかったものが、楽になった気がした。「完璧ではない私」はずっと駄目だと思っていたが、全てを「完璧にしなくてもいい」のだと、初めて思うことができた。それから、私の駄目なところは、逆に長所だとも思えるようになった。何度も失敗してどんなことを言われても、諦めずに何度もやり直し、結果を出すことができた。周りの人とどんなに差をつけられても、諦めずに続けることができた。今では私の長所になった。

高校生になって苦手なことを続けられたのはこの先生が「あなたらしいね。」と言ってくれたからだ。私は高校三年間で何

度もこの言葉に救われただろう。「私は教員になりたい。」そう強く思うようになった。

私は、人それぞれの『個性』を大切にしたい。『個性』と向き合い、長所としてとらえられるように生徒を支え、伸ばせるような教育をしたい。そしてその先生のように、「一人一人の『個性』を尊重できる教師」になりたい。

私たち農業系高校の生徒は、普通科高校では経験できない貴重な体験を授業で学ぶことができる。二年生のと畜実習も、決してそう簡単に体験できることではない。こういった農業系高校の生徒にしかできない経験を、農業系高校に入学してくる多くの生徒に経験して欲しいと思っている。私が高校で経験した多くのこと、経験できなかったことを含めて、教員になって教えていきたい。『生命（いのち）』と向き合い、生徒の『個性』を尊重できる、そんな教育ができる農業科の教員に私はなりた



高等学校の部 優秀賞

農業をして変わったこと

東京都立農業高等学校 二年

芦 沢 かりん

「農業ってダサイ。」これが、私が農業高校に入学する前に持っていた、農業のイメージです。農業といえば「力仕事が多そうなのに収入が少ないし、高齢者が田舎でやっていそう。」というイメージが強くあり、都会で働いて稼ぐ人に憧れていた私にとっては、正直言って「農業はダサイ。」というイメージしかありませんでした。しかし、農業高校で実際に実習などを重ねていくにつれ、そのイメージが変わっていきました。

農業高校に入学して最初に実習をした時は、その大変さにとっても驚きました。どんなに外が暑くても力仕事は沢山あるし、雑草は抜いても抜いても生えてくるし、どんなに泥だらけになって育てても、上手いかずに枯れてしまうこともありました。私は、「やっぱり農業なんて、こんなに苦労するのにお金も多く稼げないし、何が良いんだろう。」と思っていました。

しかし、そんな私の考え方を変える出来事がありました。一年生の冬に行われた販売実習です。私の学校には、自分たちで作った野菜を自分たちで販売することで、地域の人と関わる販売実習という実習があります。その実習で、私は多くの人と接

するレジの横で商品を袋に詰めるという作業をしていました。その時、地域の方々から、直接、喜びの声をかけていただきました。多くの地域の方々がとても寒い中足を運び、笑顔で話して下さる姿を見て、やって良かったなというやりがいを感じることができました。そこで、私は、多くの人を笑顔にできる農業の力を感じました。きつとこのやりがいは、実際にやってみなければ感じることもできないものだと思いました。

今までの私は、仕事の苦労の対価はお金しか無いと思っていました。しかし、喜びややりがいといった、形のない対価も存在する事を知ることができました。そして、喜びややりがいといった形のない対価は、お金以上に大切なことを知ることができました。何より、やる前から自分には向いていないと決めつけるのではなく、一度挑戦してみるこの大切さを学びました。実際に自分がその立場に立つことでしか見ることできない景色や、感じることでできない感情を得られると思います。

私はこの経験を活かし、農業に対する社会のイメージを変えていきたいと思いました。農業に対する社会のイメージは、私が農業高校に入学する前の私と同じように、「力仕事が多くてダサイ。」というイメージを持っている人が多いと思います。そういった人たちに、実際に農業を体験してもらい、苦労とそこから生まれる達成感を直接感じてほしいと思っています。本当の農業を知ってもらうことで、農業のイメージは変わると思うし、そこから農業に興味を持つ人も増えると思います。特に市民農園などは、種まきから収穫まで自ら行うため、実際の農業に近い苦労と達成感を得ることができると思います。また、

本格的にやれる自信がないという人たちには、収穫体験など、まず農業に接してもらおう機会を少しでも多く設けることが必要だと思いました。市民農園や収穫体験は、農業に興味を持ってもらえるだけでなく、地域交流の一つにもなります。これから、こういった活動を広げていくことで、少しでも多くの人に、実際の農業の良さが伝わり、イメージが変わってくれたらと思います。

私が最初に農業に対して持っていた「ださい。」というイメージが、実際に農業を経験することで、今では心から「カッコイイ。」と言えるまでに変わっていききました。この経験から学んだ、「やる前から決めつけてはいけない。」ということは、今後の人生の選択の中で、とても大切になってくると思います。勝手なイメージで、挑戦することもせずに辞めてしまうのではなく、一度やってみることで、実際に自分に合っているのかを知り、選択していきけるように、今後、様々なことに挑戦していきたいと思っています。



看護師としてどうあるべきか

愛国高等学校 三年

松 本 百合子

「看護師になって社会に貢献したい。」

これは私が中学二年生の時に決意したことです。しかし、私は、この少し前まで看護師とは全く違う職業を目指していました。

私は、小説家とイラストレーターになりたいと考えていました。文を書く事も絵を描く事も大好きだったからです。その思いを母に伝えた時私の人生は大きく変わることになります。母は私の夢を否定しませんでした。収入が安定しない場合には生活が苦しくなると助言してくれました。そして、

「看護師はどうか。あなたはユーモアがあるから、きっと患者さんを笑顔にできると思うよ。」

とってくれました。この時、私は母に褒められ嬉しく思うと共に、看護師に興味を持ち始めました。それまで看護師について考えたことはなかったのですが、看護師が特集されたテレビ番組を見たり、看護師になった自分を想像したりしました。

その二年後、中学校で「立志式」を迎えました。立志式とは、元服にちなんで十四歳をお祝いする行事です。将来の目標や決意などを明らかにすることで、大人になる自覚を深める目的があります。立志式の中で私は「社会に貢献できる看護師になり

ます」と宣言しました。二年前に母に勧められた時と違い自分の言葉で形にしたそれは、前よりも確固たるものになっていました。そして、中学三年生になった私は看護師になるために愛国高等学校衛生看護科への入学を志しました。高校から五年間で看護師国家資格取得が可能という都内に一校しかない点に魅力を感じました。受験するにあたり、自分がなぜ看護師を目指したのか、どのような看護師になりたいか考えました。看護師を目指した理由は、社会や人の役に立つためです。目指すべき看護師像は、正確な知識、技術、豊かな人間性を持つ看護師と自分なりに考えました。なぜこのような看護師像を考えたかというと、看護師が患者様に寄り添い命を預かる仕事だからです。こうして心構えを確実なものにした私は、無事合格し愛国高等学校に入学しました。

看護学生になって一年目、私は見慣れない専門用語や覚えるべき知識の多さに焦りを感じていました。訳もわからず目まぐるしく過ぎる日々の中で、私はあるとき目指した看護師像に近づけているのかと不安を感じながらも勉強に向き合っていました。そんな私は一年生の冬に病院へ見学実習に行った時、看護師像について刺激を受けました。患者様に看護師が陰部洗浄を行っているのを見たときのことです。その時見た患者様の表情に羞恥心があるはずなのに看護師に対して安堵するような表情を浮かべていました。その光景を見て、私は看護師と患者様の間に信頼関係があることを実感しました。それと共に私も目の前にいる看護師のように患者様に信頼されるような看護師になりたい、いやなるのだと覚悟が決まりました。以前の私であれば、陰部洗浄を見ても何も思わずに看護師が患者の

下の世話をしている事実だけを受け止めたでしょう。今振り返ると、この時の私は看護師を目指す人間として感受性が順調に育っていたと思われれます。

私の看護師像に刺激が加わった出来事は他にもあります。高校二年生の臨地実習での事です。私が初めて持った患者様は主疾患が心不全だったので、以前よりうつ病を患っており、いつも自分に自信がないのだとおっしゃっていました。私は、この患者様と接する中で、知識・技術だけでは患者様の不安や精神的苦痛を和らげる事はできない、ではどう関わるべきなのかと悩んでいました。そんな中、指導者さんから理想の看護師像について聞かれました。それに対し、私は患者様に信頼してもらえらる看護師だと答えました。すると指導者さんは、患者様に信頼してもらえらる看護師とはどういう看護師なのかと問いました。私はこの時、自分の思い描いていたものが抽象的だったと気づくと同時に、正答が分からなくなりました。次の瞬間、指導者さんはこう言いました。難しく考えなくても「患者様が安心できる看護師」が理想ではないかと。私は納得しました。患者様の中には、恐怖や不安を抱える方が多くいます。それを看護師の言動やケアにより少しでも取り除く事ができたら患者様は安心するでしょう。その結果として患者様と看護師の間に信頼関係が生まれると私は考えました。

私は現在看護学生として三年目を迎えています。ここに至るまで色々な事があり、その中で確かな看護師像を自分なりに形にする事ができました。私が今考える看護師像は「正確な知識・技術を持ち、患者様に安心してもらえる看護師」です。理想の看護師像に近づくために、私は過去の自分と向き合い勉強面そ



して人間性において成長し続けなければならないと考えています。看護学生は命を預かる医療従事者を目指しているため、知識・技術・態度と様々な角度から沢山のものを求められます。そのため忙しく大変な時もありますが、その中でも自分で確立させた理想の看護師像を心に刻んで軌道修正していきたいです。その看護師像は私が経験する出来事の中で、より現実的なものへと変化し続けるでしょう。これから先、私は沢山の患者様に出会います。その患者様全員により良い看護を提供するためにどうするべきか。私は、一人一人に寄り添い安心してもらえるような声かけをすること、疾患や患者様の個別性に向き合って根拠に基づいた看護を行うことが大切だと信じています。一人一人の患者様に安心・信頼してもらえる看護師になるために、私はこれからも努力し続けます。

実習から得たもの

愛国高等学校 三年

山 本 結 子

私が通う学校は、三年間で高等学校卒業資格と准看護師の受験資格を取得することができます。一年生の時から、一般の高校生と同じように普通科目の勉学に励みながら、看護師という夢を胸に看護について、医療について知識を深めてきました。楽しいことも辛いことも苦しいこともたくさんありました。しかし、どのようなことも乗り越えてこられたのは、同じ夢を持つ仲間がすぐそばで同じようにただひたすら努力する姿を見ることができていたからです。仲間と手を取り合い邁進してきた私達看護学生が一番輝ける瞬間。それは病院実習ではないかと思えます。学校で身につけた知識や技術を最大限に発揮できる場所だからです。と同時に、患者様やそのご家族、多くの医療従事者の方々と関わり新たな知識を学ぶことができる場所でもあるからです。三年生の病院実習は二年生の時よりも期間が長くなり、より本格的になります。ずっと楽しみにしていました。当たり前のように、病院実習に行くことができると信じて疑いませんでした。しかし今年は予想外の事態が起きました。未知のウイルスが容赦なく人類の目の前に立ちはだかったのです。それにより病院実習は当面見合わせとなり学内実習を余儀なくされました。もちろん動揺はありましたが、学内実習

であろうと病院実習であろうと実習に対する決意や覚悟が変わることはありませんでした。より一層身を引き締めることができました。

学内実習では、先生方が考えてくださった患者様の事例に沿って実習を進めていきました。ペーパーペイシエント、つまり紙の中で生きる患者様に対して私達看護学生に何ができるのか。今回学内実習を実施する上で大きなテーマだったように思います。私達は普段相手の表情や仕草、声の抑揚から五感を使って相手がどのようなことを思っているのか見極めます。看護においても同様です。しかし今回の実習は患者様の表情を見ることがお話しすることもできません。カルテに書かれた文字から推測して援助内容を考え実践し再度推測して修正していききました。何度も行き詰まり途方に暮れることもありましたが、その時間は私達に想像力とそれを形にして実践する力を与えてくれました。先の見えない時間だったとしても無駄な時間は一秒たりとなく、全て私達の自信と前を向く活力に繋がっているのだと実感しました。また必死で考え立案した援助内容を実施した後、患者様からの「ありがとう、嬉しい」という言葉と温かな表情に私は幾度となく勇気づけて頂いていたことを痛感しました。

さらに私達は、ペーパーペイシエントだけでなく、看護や医療に関連した映画等の映像を通して知識を深めていきました。映像のように全員の考えていること、感じていることを同時に見ることはできません。それにより私達人間はすれ違いうことも多くあります。医療の現場でも日常的に起こっていると言えます。患者様が私達とお話や援助が終わった後どのような表

情をしているのか、どのようなことを考えているのか。当然のことですが分からないことも多い上に知る術も限られています。しかしだからこそ、患者様と共に働く医療従事者からの一瞬一瞬一つ一つの些細なサインや変化に気づける人でいたいと強く思いました。私自身も気づいて欲しい、助けて欲しいと必要な時に素直にサインを出せる人でいたいと思いました。また、平和や平等が謳われている現代においても身体や心に病気を持つ方への偏見は人々の心の奥底に根強く残っていることを鮮明に描いている映像は、私達に看護師としてだけでなく人としての在り方を問うているように感じました。どんな姿、形であろうと同じ人間であることに変わりはありません。私達人間はそのことについて理解しているような気になっているだけではないでしょうか。もう一度全員が一人一人お互いを理解しようとする思いと、そう思うことができるだけの心の余裕が必要なのではないかと私は思います。そのような偏見に対して私達看護師ができることはごくわずか、もしかしたら無いに等しいのかもしれない。あるとするならば、ただそばに寄り添い居場所を作りそこを守り続けることなのではないかと思いました。

病院実習でしか学べないことも多くあります。しかし学内実習でしか学べないことも同じくらい多くありました。それにより私達は看護師という職業が持つ偉大な力と本質に改めて気づくことができました。看護師という職業を目指し二年間努力し最後の一年を走り抜けようとしている自分を誇らしく思います。また、たくさんの方々を支えて頂いているからこそ私達は自分の夢に向かって突き進んでいるのだと思います。これか

らも今回の実習のようにできないことばかりに目を向け悲観的になるのではなく、できることに目を向け目の前のことを力の限り行っていくつもりです。その姿をお見せすることが、支えてくださっている方々への恩返しになると信じています。

私達一人一人は微力な存在でも、全員で協力すれば何かが変わるかもしれません。私達人間の最大の武器である笑顔とともに一歩を踏み出せば、明るい未来へと歩み出すことができるかもしれません。下を向くのではなく上を向くことで、一筋の光を見つけられるかもしれません。諦めるのではなく努力すること、誰かの心の支えになることができるかもしれません。そう思わせてくれた実習でした。試練の連続である「これから」を生きる糧ができました。

いつの日か、全員がゆつくりと息を吸い込み雲一つ無い空を見上げ微笑み合える日が来ることを切に願いながら、私は今日も一人でも多くの患者様を救うために勉学に励みます。



高等学校の部 佳作

世界で活躍できる日本料理人をめざして

東京都立農業高等学校 二年

阪口和紀

私の将来の夢は海外で日本料理を作る調理師になることです。きっかけは高校一年生の夏休みでした。

私は、四年に一度開かれる「世界スカウトジャンボリー」に参加しました。それは世界中のボーイスカウトが集まり、キャンプ生活を通して様々な文化や価値観などを共有する場でした。今回の開催地はアメリカ合衆国ウエストバージニア州で百六十九カ国から約四万五千人のスカウトが参加しました。十日間の日程の中で一日だけ「culture day」と呼ばれる日がありました。その日は、世界中の国の食べ物や服、踊り、言語、宗教について実際に体験するイベントがありました。私の隊では、そうめんとα化米の炊き込みご飯、緑茶を主に準備していました。そしていざ海外の人に食べてもらうと、ほとんどの人が笑顔で「おいしかった」と言ってくれました。

私は、それがとても嬉しかったです。しかし、日本について知らない人や日本食があまり口に合わない人も少なくなかったことには驚きました。その時、私は「日本料理は知られていくように知られていない」と感じました。簡易的に現地の調味

料を使い料理した事や、自分の英語での説明が不充分であったのかもしれない。そう考えた私はどこでもおいしいと思えるような料理をよりたくさんの人に食べてほしいと思いました。これが私の将来の夢が決まったきっかけです。

また、参加した期間前後の数日はアメリカ国内のいくつかの都市を観光しました。なかでもシャーロットという町のスーパーマーケットで買った照り焼きチキン丼は、とても印象に残っています。なぜなら日本とアメリカは数千キロメートルも離れているのに味や見た目がほぼ同じだったからです。この出来事から私は、どんな場所でも技術や知識、経験があれば何でも作れるのではと推測しました。

帰国後、私はどうすれば今の環境下で将来の夢を実現できるのかを考えました。その結果、自分に足りないと感じた調理技術、英語力を改善しようと思いました。調理技術は学校での授業にしっかりと取り組み、自宅では魚の三枚下ろしや飾り切りなどの基本から応用まで一通り挑戦しました。他の人に堂々と食べてもらえるレベルを目指し、繰り返し今も練習しています。もう一つ、英語力の方はSNSを使い、海外に住む友人と英語でやり取りの中で、海外にいても作れそうな日本食のレシピを伝えたり、自分の作った日本食の説明をしています。また、学校の調理実習で作った料理も紹介しています。日本料理のレシピを英語で説明する事で英語力の強化はもちろん、日本料理について違う見方をすることもできます。例えば日本人は生卵を食べるが、アメリカ人は椎茸を生で食べるなどの食べ物選択の違いです。一方、他の国の伝統料理を教えてもらい、実際に作ったりもしてきました。そのやり取りをダイレクトメッ

セージでほぼ毎日、ビデオ通話を一週間に一回から二回しています。このような生活をしてほぼ一年経った現在、英語で料理の説明をした時、始めた時よりも速く、より詳しく伝えられるようになりました。それは相手の反応を見ても実感することが出来ます。また高校一年の三学期に英検準二級を取れたことも、つながりました。

そして海外での日本料理のお店やレストランに日本人以外の調理師が増えてきている事を知り、驚きました。同時に今の日本料理の調理師が海外で働くときに何を求められているのかを考えるきっかけにもなりました。私はより高い技術と知識を得るために、高校卒業後は日本料理と寿司の専門学校への進学を考えています。その専門学校は海外からの留学生が多く、海外の日本料理のお店やレストランへの就職も可能でした。その専門学校の講師の先生から外国人でも技術と知識などを独学でも手に入れられれば、お店やレストランで充分働くことができると思いました。しかし、日本人が海外で働くためにはそれ以上の技術や知識を身に付けるほかに、わざわざ日本人を雇ってまで必要だと納得させられるスキルや何かを考えておく必要があると言われました。

私は今まで海外で日本料理を作りたいと思っていましたが、講師の先生から言われた事は意識したことがありませんでした。その話を聞いた時、私は海外で働くことについて知っているようで無知だったのだと痛感しました。私はこの一年間、海外で働くことについて自分の経験から考えた足りない部分の強化をしてきました。しかし人に教えてもらわないと自覚できなかったことも多いことに気づくことができました。高校卒業

までの残り約一年半は継続してきた事は継続し、考えるべきことは一生懸命考えます。そしてなるべく多くの人から自分に足りないものを吸収して過ごすことです。それが今の私にできることだと考えます。

私は、世界スカウトジャンボリーに参加したことは、ただのきっかけだと思っています。なぜなら参加したことよりも、その後の試行錯誤や考え続け行動したことがとても大事な経験だと考えるからです。その経験を活かし、多くの人を日本料理で笑顔にできる調理師になりたいです。



視点が変わると

東京都立農業高等学校 二年

高松美琴

ほんの少し手間をかけるだけで、できたものに大きな差が出る。味や見た目、来年そこで育つ野菜。少し気にかけるだけでこんなにも変わることを知った。

野菜を育てる時、どんなことに気をつけないといけないか。雑草を抜き、耕地を作り、種をまき、苗を植え、水をやる。このやり方でも、野菜は育ち実是可以できるだろう。だが、おいしいだろうか。まずはないだろうが、微妙ではないか。家で育てた野菜がそれにあてはまった。なぜだ、と色々調べたりもしたが、あまり変わらなかった。その答えを授業で見つけた。

土が違ったのだ。ただ肥料をまくのではなく、その時の状態に合わせて肥料を変えているのだ。ここから始めなければいけないのかと土を触ると、とてもやわらかい。匂いも「あ、土の匂い」と感じた。野菜によって肥料は変わるが、多く使われているのは油かす、魚粉、腐葉土の三つだ。土の上にふりかけたり混ぜたり、野菜を植える二週間前から準備をしなければいけない。わらを上にかぶせたりもする。土作りが終わってスターラインが作られることを知った。「いい野菜を作りたいならいい土を作りなさい。」先生の言葉通り、学校で収穫した野菜は、大きくておいしいものばかりである。野菜を育てる前に、

まず、土に視点をおかなければいけない。先生はこうも言っていた。「森が何十年とかけていることを一瞬でやっている。」肥料にはたくさん栄養と微生物、そしてすごい力があるのだと驚き、納得した。森何十年分の栄養が、野菜にこめられているのだから。

もちろん、土作りが終わっても、気をつけなければいけないことは山のようにある。スタートラインに立った後が勝負だと思っている。一つ目は覆土の厚さだ。覆土とは、種や苗の上にかける土の厚さのことである。3mmや5mmとほとんど勘に近い数字だった。少し手を抜いてやった結果、一つも発芽しなかった。発芽とは芽が出たという意味。土が厚くて発芽できなかったのだ。手を抜いたことが分かってしまったのだった。

二つ目は病気と害虫に気をつけることだ。目をひかせておかないと簡単に弱まってしまふ。虫がついていけば、葉や茎、内部にまで入って全て食べられてしまふ。病気なら農薬をまいたり、抜いたりしなければいけない。授業以外にも見に行く必要がある。

まるで生き物を相手にしているようだ。植物も生きているのだからあたり前だが、何をしたのかそのまゝ影響を受けるので、鏡のようだと思うようになった。そう思うようになってから、視点を変えるよう意識した。人ではなく、植物になったつもりで、細かい部分に目がいくように。先生の言葉をメモして実践することをくり返していくと、無意識に見るだけで、何をすればいいのかわかるようになった。それだけではない。野菜たちの姿が違ふように見えるのだ。味も違う。視覚的な違いもあるのだろうが、少しずつ成長する姿は、まるでわが子を見る

ようなものだ。実がなった時はうれしすぎてとびはねた。どうしてこんなに気持ちが変わったのだろうか。

それは手間のかけ方だった。前なら土に肥料をまぜ、苗を植えて、水をやって終了だった。今はその行動一つに、三つくらい注意することを頭に入れて気をつけて実践した。たったそれだけで、こんなにも変わり、感動を与えてくれるのだ。野菜を育てるだけの話ではない。花や料理、物作りにも言えることである。手間とは違う、一種の愛情なのではないだろうか。きれいに咲いてほしい、おいしくなれ、自慢の作品となつてほしいと願うから手間をかける。

少し手間をかけることで世界は簡単に変わり、よくしように考えるので、様々な視点から物事を考えることができるようになった。

一面だけを見なくなったので、もっと深く知ることができたり、世界が広がったのである。手間をかけることで視点が変わるので、視点を変えて様々な姿をみてみたいと思う。



今生きる私達に出来ること

東京都立農芸高等学校 二年

岩 本 有 未

「廃棄お願い。」そんな一言で、おにぎりやお弁当、サンドイッチなどを黙々とカゴに入れていきます。私は半年以上コンビニでバイトをしていて、ここでは十二時・十八時・二十四時・二時の計四回で廃棄を行います。時間によって廃棄する物が変わってきますが、基本はお弁当やおにぎりは毎時間廃棄をし、デザートやパンは十二時にするのが決まっています。特に十八時や、雨で天候が悪くお客様がいらっしやらない時間帯に廃棄が多く、そんな時の廃棄量は三十個以上ありました。またチキンやアメリカンドックなどのファーストフード商品は、賞味期限が六時間や五時間と短いので廃棄が多くあります。最初の頃は、まだ食べられる商品を捨てる事に罪悪感がありました。けれどキャンペーンなどで安い時は、いつもより多く作っておかなければいけません。これは、お客様がいらっしやった時に買えないと申し訳ないからという、お店側からの親切心だと働いて思いました。学校の授業で学んだように、日本は賞味期限や消費期限などに厳しく、新鮮な商品を届ける事が基本になっています。実際に私達店員が廃棄商品を見逃してしまい、お客様がもってきてしまってもスキャンが通らず売る事は出来なくなっています。また廃棄になった商品を、店員が持って帰る事

は原則禁止になっています。理由としては、廃棄商品を食べた事により食中毒が発生し、その事実が報道などによって明るみに出た場合、コンビニチェーン全体の管理不十分とのイメージが広がり、他の商品まで売り上げを落とす事態になる恐れがあるからです。それほど嚴重に管理されており、またお客様から信頼をされています。けれど、私達のそんな思いが食品ロスを生んでまっていますのです。その対策として、アルバイト店員が出来る事は数少ないのかも知れませんが、ファーストフード商品で前回の売れゆきなどを見て作る個数を一人一人が意識する事など小さい事しか出来ませんが、そんな行動一つ一つが継続されれば廃棄量は大きく減少すると思います。私がコンビニをテーマに上げたのは、決してお客様に廃棄量を考えて品物を沢山買って欲しい訳ではありません。皆さんの知らない事実を知って欲しかったのです。自分達が思っている以上に、コンビニチェーンなどで出る廃棄量が多い事。私達には身近なように改善するには難しい問題である事。だから企業の廃棄を中心として減らすのでなく、私達家庭から出る量を減らす事を一番に考えるのが良いのかもしれない。

一般家庭からの廃棄量は七百八十九万トンで、そのうち食品ロス量は二百九十一万トンです。捨てる理由としては、食べ残しが半分以上を占めています。これは日本人の考え方によって生まれた問題だと私は思います。私がファミレスでバイトをした時に、いっぱい頼んだのに食べられず残していくお客様が何名かいました。このように「もったいない」という気持ちが薄れ、残す事が当たり前になっている部分があります。このまま解決出来ず、捨てる事に無関心だと三つの問

題が起きます。まず、世界では人口が増えるが食料が行き渡らず、将来は深刻な食料不足が起きます。二つ目は、世界には絶対的貧困が七億以上います。満足に食べられない人達がいる一方、飽食で食品を捨てているのは許されない事だと思いませんか？三つ目は、経済的な損失です。生産過程や流通において多くのコストがかかったのに、費やした時間や手間も捨てる事で無駄になります。食品ロスは今を生きる私達だけでなく、何十年先の未来を生きていく子達にもものしかかっていく問題なのです。だからこそ、今を生きている私達が出来る事をして少しでも阻止するのです。例えば、冷蔵庫にある食材を確認してから買い物をする事や必要な分だけ買う事。調理では保存方法をしつかり理解する事、作りすぎた料理はアレンジをする事など、どれも頭では分かっていますが実行に移す人は少ないのかもしれない。けれど、積み重ねれば減少する事は間違いありません。食品ロスで一番の解決方法は、一人一人の意識を変える事です。私達がこうして生きているのは、決して当たり前ではありません。人間が生きている今も、産まれて死んでいく命がある事。私が授業で畜産業のテレビを見た時、そこでは家畜を家族同然に大切に育て最後に出荷をしていました。私達人間のために犠牲になった牛や豚や鶏には、育てている人々の思いが詰まっているのです。それを理不尽に捨てるのは許される事ではありません。命を頂いているのならば、私達に出来る事は感謝の気持ちをもって全て美味しく頂くことだと私は思います。ありがとうの気持ちで、「いただきます」や「ご馳走様」を言う様にしてください。そんな心がけが、未来を変えていくのです。

都市緑化の発達

東京都立農芸高等学校 三年

仲山 祐未

私が幼い頃の自然・緑に対するイメージは田舎に多くて、都会は少ないというものでした。今でも田舎の方が自然は多いとは思いますが、都会の緑は増加し働く人、そこに住む人様々な人にとって癒しとなるようなそんな造りになっていると感じられます。また最近は自然環境を守ろうとする意識が高まり、より綺麗な環境をつくり出すためでもあると思います。

このような緑地空間は、気付いたら私たちににとって当たり前のものになっていました。しかし新宿などの大都会から少し離れた場所に行くと、この自然的環境が当たり前ではないことに気づかされます。例えば、道路脇にある小さな緑地空間は手入れが行き届いておらず、葉は枯れ荒れていました。もちろん大きな街路樹などの木が枯れてしまうなんてことはないと思います。しかし細かいところまで綺麗な緑地空間を維持するという事は簡単ではないのだと改めて気づきました。

そんなことに気が付けたきっかけは、去年の夏に行ったインターンシップです。私は去年の夏、インターンシップに参加させていただき、造園会社の見学・体験をさせてもらいま

した。その造園会社が手掛けた結婚式場の庭園を見させていだくため、車で移動していた際に車から見える街路樹や屋上緑化など緑地空間についてこのようなお話をいただきました。「今は昔とは違い、緑を増やそうと道路や建物の周りに緑地空間が増えて来たよね。でもそれは始まったばかりなんだよ。だから緑が多いと思われていた田舎の方の建物などの周りには、まだ緑地空間が十分に備わっていないんだよ。」この話を聞いたとき、とても衝撃的でした。言われてみれば確かにその通りでこれは自分一人では気づけなかった事でした。それ以来、私は都市にある緑地空間の見方が変わりました。自分にとって身近で当たり前だと思っていた緑化施設は、本当に多くの人の協力により出来ているものだと思えました。

特に都市緑化が進んでいて、そう感じたのは「大手町の森」です。「大手町の森」は、去年の冬に学校の校外学習で行きました。大手町の森というのは、東京の中心地、大手町の高層ビル群の谷間の三千六百平方メートルの敷地に作られた緑地空間です。ビジネス街の広場にある本格的な自然の森は、働く人がリラクセスできる場所となりました。一番印象に残っているのは、地上と地下一階をつなぐエスカレーターのある木々です。エスカレーターの隣だから斜面になっているのにも関わらず、様々な樹木や下草がしっかりと植えられています。大手町のような人が多く行き交う場所に突如として緑地空間を生み出すのは簡単ではないと思います。私は、てっきりその場で一から育てて立派な形にしているのかと思ったので、実際の方法を知った時とても驚きました。そ

れは「プレフォレスト」という手法です。千葉県君津市の山林に約一千三百平方メートルのスペースで、土の起伏や人工地盤、土壌の成分、樹木の密度や種類などを計画地と同じように作り、約三年かけて施工方法や植物の生育、適切な管理方法を検証します。そしてその結果をもとに、千葉県君津市から大手町に移植するというものです。学校でも移植について学んでいましたが、こんなに大規模に活用できるのだと仰天しました。このプレフォレストは、作り手側の「大手町」という日本の中心といえるオフィス街であればこそ、その対極ともいえる野性味のある本物の森に意義がある」という想いから、始めたらしいです。私は、この想いにとっても感激しました。利用者が緑で癒してもらうために、どんな工夫をしたら良いのか、どのような形にしたら良いのか、そんな強い気持ちを感じました。

都会は人や車が多く、人混み、大気汚染、様々なストレスを抱える方がいると思います。そんな人たちにとって癒しとなるような空間を創る事ができる、そんな仕事に私は強い憧れを抱きました。今は、昔と違い都会に緑が少ないというイメージはもう古いのです。これからの時代は、日本全体が緑豊かで人がリラクセスできるような空間が必要だと思います。また、造園士が手掛けるものは庭園だけでなく、景観や風景を創る事も加わってくると思います。

私は将来、人が当たり前に癒しを感じられる空間をデザインするデザイナーになります。そのためには、さらに樹木や庭園などの知識も深め、それらを踏まえたうえで今在るべき形の緑地空間を学んでいきたいです。

私が私になるまで

東京都立瑞穂農芸高等学校 一年

町 妃菜子

「昔の自分」を好きじゃなかった。いや、好きになれなかった。自分の好きなことは思い通りにいかなかったし、自分の意見もはっきり言えなかった。そんなことの繰り返しで毎日がつまらなかった。

私が小学生だったある時、同じクラスだった人に「目つきが悪い」と言われたことがあった。その時の私は考え方がネガティブで、少しのことでも何か言われたら落ち込んでしまう様な子供だった。他人がそこそそ話をしているだけで、「あ、私のことかな。」と思ってしまっていた。そんな時、私を変えてくれる出来事が起こった。

私が変わったのは中学一年生の春。丁度私が中学校に入学したての頃だった。まだ仲の良かった人たちとしかなじめていなかった私が、初めて自分から人に声をかけることができた。その子は快く私を受け入れてくれて、なんだか私を迎え入れてくれるみたいで、とてもうれしかった。しかも、私を受け入れてくれた子は、小学校六年生の時に私が通っていた小学校に転校してきていた子だった。

当時、他人との関わりが億劫だった私は、転校してきた子を良くは思えず、あまり良い印象では思われていなかったと思

う。その子は自分の意見がはっきり言えて自分の好きなことを好きな時に好きなだけやって、いつも自信に満ち溢れていた。今思えば私からしたら自分とは真逆で、キラキラ輝いていて、羨ましいから嫉妬していたのだと思う。

何もできなかった私と違ってあの子は私にないものをすべて持っている、世界が違うのだ、と思った。そんなことを思っていた時、初めてあの子が怒られた。みんなの前で攻められていた。確かにあの子は悪かったけれど、その子だけが悪いわけでは決まらなかった。私が同じ立場だったら諦めて謝ってその後で愚痴をこぼしていただろう。でもその子は予想もしていなかった行動をした。「ごめんなさい。でも」と自分の非を認めて謝った上に、自分がおかしいと思った部分を的確に話していた。そのとき私はとても感動した。ずっと私が憧れていた事。かっこいいと思ったし、自分もこうなりたいと思った。私は中学でこの子と絶対仲良くなろうと思った。

中学生になってたくさん話をした。家が近かったので、毎日の放課後その子の家でずっと遊んだ。あまり笑わなかった私に、笑顔がどんどん増えていった。

これがきっかけで、もっと人と関わりたい、もっと楽しみたい、もっと笑いたい。そう思えるようになった。だから努力した。

みんなと話せるように自分から積極的に行ったり、できるだけ印象を良くするために笑って話したり、自分ができることをすべてやった。それが出来た時は自分をすごく誇りに思えた。自分もやればできるじゃん！と。

そこから、私は大きく変わることができた。自分の好きなこ

とを飽きるまでするようになって、自分の意見だってはっきり言えるようになった。前までつまらないだけだった毎日が飽きすらもこない幸せな日になった。

誰かが言った。「行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる。」その通りだと思う。

私は昔から今の私ではない。昔の私があったからこそ今の私がある。ほんの少しを変えるのでも、自分からしたらとても難しいし、そう簡単にできることじゃない。だけど自分が変わろうと努力してみないと何も始まらない。また、変わろうとしても変われない人達に伝えたい。あの一言でどれだけ変わったか、どれだけ自分を好きになれたか。

自分がどれだけ変わったかを実感するのが生きがいじゃない。自分を変えようとする意識を持ちながら飽きない日々を過ごすのが私の生きがい。たとえどんなに悔しくても嫌なことがあったって、「ああ今日はこんな日だったな。」とあったことをバネにして次に生かそうと努力する自分がすごいし、大好きで仕方がない。

昔では絶対こんな考え方をしないし、今現在こんなポジティブでいられること自体が驚くべきことだけれど、あの出来事になかったら、今の私は今の高校にも行っていなかったのではないかと思う。

私は「昔の好きになれなかった私」でさえ今は大好きになれた。人生山あり谷ありって言ったって、この先何があるなんて誰にも何もわからないから、失敗したって後悔しない人生を送ることを決めている。

まだまだ先は長いけど、今の毎日から学べた事を水の泡にしないように頑張る。こうやって自分の成長過程を見届けるのだって生きがいだ。生きがい是一つじゃない。これからもっと自分だけの生きがいを見つけたらいいと思う。

何故、今私がこの学校にいるのか。それは自分のやりたいことをやればいいと教えてもらえたから。此処で新たな生きがいを見つけたかったから。今は有言実行で私なりの生きがいを見つけれることができている。

この瑞穂農芸高校での生活はあの子の一言があったから、今の自分の好きなことをたくさんできているのだと思う。たくさんの人に囲まれて、大好きなみんなに囲まれて、信頼している大人や友達に囲まれて。あの言葉が一字でも欠けていたら意味がない。それだけに響いた。こうやって生きがいを与えてくれたから好きなことの関わりを、色んなことを教えてもらったから今の私を持つことができているのだと思う。

私に生きがいを与えてくれたあの子だけでなく色々な人に感謝を伝えたい。変わりたいと思っている人たちに自分なりの生きがいを見つけたことが大切だ、と。いつかそういう子達に意志を伝えることが出来るように願っている。



食品を作ることとまた、楽しいことなのだ

東京都立瑞穂農芸高等学校 一年

村 田 彩 羽

誕生日にケーキを買ったとき、バレンタインにチョコレートをもらったとき、喫茶店でプリンを頼んだとき。きっとその特別感は、食べた人を幸せにしてくれるだろう。

食べ物はおいしいし、食事は楽しい。私もみんなも、食べることが大好きだ。「いただきます」とあいさつをし、「ごちそうさまでした」と感謝をする。日本は特に、食に敬意がある人たちの国だと思う。その中でも、ちょっとした贅沢や、祝い事や行事でいただく食事は別格だ。そしてそのとき口にするものの多くは、「手作り」であることだろう。

小さいころ、自分の誕生日のケーキを、母と一緒に買いに行った。好きな種類を選んで、ろうそくをつけて、プレートの名前を指定した。その日は誕生日より何日前で、なぜ今日なのだろうと疑問に思った。結局その日は予約という形で、焼き菓子を買って帰っただけだった。帰り道に母に尋ねると、「予約の時間に間に合うように、お店のお姉さんが作ってくれるのだよ。」と言った。自分の誕生日のために、華やかなケーキを丁寧に手作りしていることを知って、とてもうれしかった。そのとき食べていた焼き菓子もきつとそうなのだと思う瞬間はよりおいしく温かく感じた。誰かを祝うために作っ

たケーキも、誰かにあげたくて作ったチョコレートも、自家製の味を知ってほしくて作ったプリンも、手作りした人のまごころや優しさ、愛情が織りなした、ものづくりの結晶なのだ。

それから、私は食品専門店で目を向けるようになった。良い例が、祖母の住まいの近くにある道の駅だ。地元の特産物を取りそろえた直売所、パン工房、ミート工房、洋菓子店にアイス、ジェラート屋。ものづくりのすべてが詰まったような場所だった。中学に上がってからは、毎年、夏休みに決まっていた行っていた道の駅が、また違った見方で見る事ができるようになった。それぞれの工房で、その道を選んだ人たちが集まって商品開発をし、それをお客さんに売っていく姿がとても素晴らしく思えた。エプロンや衛生服に包まれた姿が格好良く思えた。自分が本当にあこがれる仕事の姿が見えて、目指す場所は「食」にあるのだと実感した。

「食」に対する考えが深まり、私が選んだのが農業系の高校であった。高校生活の中で、実際の仕事同然の実習ができることに驚きと感動を覚えていた。実は、志望校を決めたこの時期に、お菓子を作るだけで授業になるのが羨ましいと言われたことがある。当時の私は、その言葉を大して気にせず、軽く受け流していたが、今同じことを言われたら、きつと反感を覚えるだろう。

入学して初めて製造実習に臨んだ日。その日はジャムの製造だった。家で作る場合とは違うということは分かっていた。それを覚悟しながらも、実際はその光景にとっても驚かされた。最初に材料の配合や名前を覚えた後、それを使って製造にあたった。そうはいっても、用意された材料で早速煮詰め始め

るといふわけではない。必要量の容器を見極め用意し、それを水洗するところから始まるのだ。そして常に先生の口は動いていて、作業をしている間にも知識が与えられ、その場で聞いて覚えていく。ただ机に向かつて文字を書きとるのは訳が違ふのである。もちろん板書することも大切で、授業の最後はただひたすらにノートに書いた。実習においてもものをつくるとき、書いて得た知識を最大限使っていかなければならない。その後レポートを作成して改めて内容を理解していかなければならない。いざ応用となったときに、自分がどれだけ理解していたかを知らなければならぬ。生徒に平等に与えられた時間の中、どれだけの知識を手に入れ、持って帰るかが授業にあたる最大の鍵であるのだろう。

「つくるだけ」とは到底かけ離れたものだった。農業系の高校ですることは「つくるだけ」ではない。そう思うかどうかは、個人の臨む姿勢にあるのだ。上辺だけの知識、テストの穴埋め程度に覚えていては、いつかものをつくるにあたって篩にかけられるだろう。製品になるものを製造するとは、そういうことだ。「実習で完成した」だけの食品より、「食品そのものを学び、追及し完成させた」食品とでは、達成感も満足感も全く違うのだろう。いつかそれを理解する日が来る。自らがものづくりに対する喜びを抱くときを心待ちにしているのだ。

道の駅の新商品が売れるのも、学校祭で実習生産品が売れるのも、かつての同志が同じようにものづくりの喜びを胸に築き上げたブランドと実績、信頼が受け継がれ実現した努力の賜物なのだ。「食」の道を選んだ今、私たちは先駆者に倣っ

て、先の道を繋げていかなければならない。

将来は販売業に就くかもしれないし、接客業に就くかもしれない。パティシエを目指すかもしれないし、ブーランジェを目指すかもしれない。かつての「お客さん」から「店員さん」になる日が来るかもしれない。私がどのものづくりを極めるか。私のものづくりの喜びが何を生み出すか。農業系高校での三年という期間で、私がたどる道中で何を見つけるか。今からがとても楽しみだ。

中学校の卒業式前日、よくしてくださった先生方に、チーズケーキとチョコレートケーキを手作りし、差し上げた。この学校を卒業するとき、ものづくりの喜びを経て、私の作るケーキはどんな進化を遂げるのだろうか。

食べ物おいしいし、食事は楽しい。食品をつくることもまた、同じくらい楽しい。



私にできること

東京都立町田工業高等学校 三年

山本 爽

ITについてどのような印象を持っているだろうか。便利な道具、あるいは最先端技術だという印象が強いだろうか。もしかすると、攻撃されたり個人情報情報が漏洩してしまう危険なものだと思っている人は少なくないかもしれない。私は工業高校に入学するまで、クラッカーから攻撃を受けることを身近なことだと感じていなかった。ITの危険性についても十分に理解しておらず、単に利便性に優れているという印象しかなかった。父親がIT系の会社に勤めている私にとって、ITは身近な存在だ。中学校の頃、情報系の資格の参考書でサイバー攻撃の件数が年々増加している現状を知り、情報セキュリティに興味を持つようになった。その時から、将来はセキュリティエンジニアになりたいと思っている。

そのために、私は工業高校の情報システム系列に所属している。そして日々、授業を通して、ITについて学ぶ中で、「情報セキュリティ」について大きな考え違いをしていたことを知った。私は「セキュリティ」と呼ばれる分野を学習さえすればセキュリティエンジニアになれると思っていた。しかし、「セキュリティ」は独立した一つの分野ではない。例えば、インターネットに接続されるコンピュータを外部からの脅威から守る

ためにネットワークの知識が必要になる。また、マルウェアはプログラムであるから、プログラミングに關しての知識も必要になる。更に、そのネットワークの構成や、プログラミング言語の種類は様々だ。このように、セキュリティの仕事には、IT全般に対応できる深い知識が必要であることに気付かされた。

また私は、セキュリティ対策に関しても誤解していた。専門知識のないエンドユーザがセキュリティ対策を講じることは不可能に近く、対策は主に開発者側が行うべきだと考えていた。ところが三年生の時、外部講師の方からIoT機器のセキュリティの実態に関する講演を聞く機会があった。すると、IoT機器が攻撃の対象になりやすいのは、開発者側の問題ではなく、ユーザ側のセキュリティ対策に原因があるという。例えば、パスワードを工場出荷時のままにしておいたり、容易に推測されてしまうような文字列に設定したりすることだ。私は攻撃されやすい理由を、製品に問題があるのではないかと予想していたため、その原因が脆弱なパスワードだと知ってとても驚いた。このような使い方をすれば、攻撃されるリスクが高まり、結果としてIoT機器が非常に危険なものになってしまうのは当然だ。「情報セキュリティ」は『情報の機密性、完全性および可用性を維持すること』(IS Q 27002)であり、これにはパスワードやID等を適切に設定・管理することも含まれる。セキュリティ対策は、「攻撃の三要素(動機、機械、手段)」の全て、あるいは一部をなくすことで、効果が高まるとされている。そのため、攻撃を避けたいのであれば、パスワードだけでも適切に設定する必要があるのだ。このことから、技術につ



いての知識が十分になくても、セキュリティ対策を講じることができるということに気付かされた。

高校入学時に想像していたように「高校を卒業してすぐにセキュリティの仕事に就く」のは難しいということを、今の私は理解している。私には、実践力はおろか十分な知識もないからだ。しかし、工業高校でITについて専門的に学び、セキュリティの重要性を理解することができた今、ITの利便性とその安全な使用方法を多くの人に知ってもらいたいと思うようになった。もし、危険性と利便性のうち片方しか知らない人がいるのであれば、是非その両方を理解してもらいたい。私はこれから勉強を続け、より多くの人の生活が豊かになるような、安全で利便性に優れた情報技術を提供できるような仕事をしたい。そして、いつかは情報の安全を守れるようなセキュリティエンジニアになりたいと思う。

日本の工業高校に進学するぞ！

～ネパール・カトマンズからの挑戦～

東京都立六郷工科高等学校 三年

サキヤ アシス

私は四年前に、ネパールのカトマンズからものづくりを学びたい一心で両親が働く東京に来ました。私が何故日本の工業高校進学を目指したのか、当時の私自身の思いを述べ、六郷工科高校での三年間のチャレンジの足跡を辿り、更に六郷工科高校卒業後の進路について現時点での夢を語りたいと思います。

私は子どもの頃からものづくりを通して人々を幸せにしたいと考え、自動車エンジニアになる目標を貫いています。この夢を実現するためにカトマンズの中学卒業後、市内の普通高校（人気校）を受験しましたが不合格。

ネパールには普通高校と総合学科高校は沢山あるが、日本のような工業高校は無く、高校修業年限は二年です。エンジニアになりたくても先ず普通高校で学ぶしかないのです。

私はどうしても自動車を学びたかったので将来を考え海外の高校を調べました。その結果、日本では専門を学べる工業高校があることを知り、東京で働く親の勧めもあり日本の工業高校に進学することにしました。

初来日から一年間、多文化共生センターで日本語と日本で暮らす作法を学び工業高校受験に備えました。一年間は風の様に

過ぎ、高校受験を迎えました。在京外国人生徒を募集する都立高校は七校ありましたが、私が学びたい自動車を学べる工業高校は、六郷工科高校一校だけでした。迷わず第一希望は六郷工科高校に決め、学校説明会や文化祭に参加して学校の様子を見て、進学が決意が確かなものになりました。

特に見学で気に入ったのが、マニュアル車とオートマチック車両方を学べることで、二人乗りスポーツカー三台を実習で触れること、整備と製作二つのコースがあり好きなコースを選べることで、製作を選べば二年次から好きな専門科目を学べることで、実習室に自動車をいじる工具や測定機材が豊富にあり許可を得て自由に使えること、二年次には地域企業で生徒全員がインターンシップを経験できること、そして自宅から通いやすいことでした。

受験に際して在留資格証明書など様々な書類提出を求められ事務手続きは大変でしたが頑張った甲斐があり六郷工科高校に入学できてとても嬉しかったことを思い出します。入学後、学校に慣れるのに半年位かかりました。一年次は言葉の壁が高くテストで良い点数も取れなかったし、成績もあまり良くなかったのを覚えています。

徐々に学校生活にも慣れ勉強の仕方が分かってきた頃から友達も沢山出来ました。先生が話す言葉を聞き取り、意味のわからない言葉をメモして、休憩時間スマホで調べたり、それでも意味のわからない言葉は友達や日本語理解の先生に聞くなどして頑張りました。

私達外国籍生徒は校長の方針で、放課後の日本語理解の授業を必ず受講する必要がある、部活動が出来なかったのは残念で

すが、この日本語理解の授業は高校生活を充実させるために非常に役に立ちました。このおかげで日本語能力検定試験三級に合格できました。

二年次は学校生活にも慣れ成績も良くなりました。三年間の高校生活の中で最も楽しい一年間でした。

人生初となる日本企業での三日間インターンシップ参加。台湾修学旅行参加。企業連携教育成果発表会や工業科生徒研究成果発表大会での発表など、様々な体験活動を通して高校生活を満喫しました。そして、工業科生徒研究成果発表会ではインターンシップ体験発表が評価され特別賞を受賞しました。このような体験が自身の成果となり、体験を重ねる度に更なる意欲が湧き出るのを感じました。

インターンシップでは、企業現場で社員の立場を経験しました。ものづくりの現場では挨拶は勿論、5S（整理、整頓、清掃、清掃、躰）の徹底、そして、作業している時や機械を動かす時に相手に知らせる。点検作業をする時、大きな声ではっきり指示を出してしっかり指差し確認する。更に現場作業員と常にコミュニケーションをとる等、安全最優先により、より良いものをつくる日本型ものづくりの原点となる作法を沢山学びました。

そして私のこれまでの頑張りが認められ、令和二年三月末には全国工業高等学校長協会優秀生徒表彰者に選ばれ受賞しました。

海外修学旅行では、台湾の歴史や文化、台湾人の考え方など親日と呼ばれる台湾の歴史的背景を自分なりに理解出来るとともに修学旅行を通して多くの友達が出来ました。

三年次に入りコロナ禍の影響で学校に通えない日々が三か月程続きましたが、専門を更に深めたいと思い、大学進学に向けて日々勉強に励んでいます。私は工学部機械工学科で流体力学等を深く学びたいと考えています。そして、自然がつくり出し脅威となる、台風や洪水が自動車に与える影響を研究し自然災害から身を守る自動車開発に役立てたい。

おわりに、私はチャレンジこそが人生を豊かにする原動力と考えている。四年前にネパールから来日し、六郷工科高校入学にチャレンジしたことが今の私を創り、これからの未来に繋がっている。高校在学二年半で、日本語能力検定三級、漢字検定五級、英語検定二級を取得し卒業迄の半年で日本語能力検定二級と英語検定一級の取得にチャレンジします。

私は母国語に加え英語と日本語、三カ国語を使えます。この言語能力を活かし大学進学後は多くの人脈を創り将来は世界の仲間と自動車に関する様々な新技術を開発する企業を立ち上げるエンジニア起業家としての夢が膨らんでいます。是非やり遂げたい！

日本のものづくりを支える、日本にしかない工業高校は私にこのような夢と希望を与えてくれる素晴らしい学校です。

私が在籍する六郷工科高校とここまで導いてくれた全ての人々に感謝して締め括ります。



開発途上国発展への私の挑戦

東京都立第三商業高等学校 三年

橋 本 咲 良

私が中学生だった頃、特に何になりたい、どんな職業につきたいという志望がなく、部活動に明け暮れる日々を送っていました。しかし、幼い頃から海外の文化や言語に興味があり、いつかふれあいたいという一つの夢がありました。

中学三年生の後半になり、まわりは着実に準備を進めていました。そんな中、未だに志望する高校が見つからない私に担任の先生が「商業高校はどうだ？」と勧めてくれました。その時、初めて「商業科」という学科があることを知り、詳しく調べてみると、ビジネスについての勉強ができ、さらに資格が取得でき、就職率が高いというこのような点にひかれ現在在学している商業高校を志望しました。あまり、どんな職業に就きたいという志望がなかった私には資格が取得できる点と就職率が高いという点はとても都合の良いことでした。

そして、無事に進学できた高校にてビジネスの勉強をするのはとても新鮮で楽しいことでした。両親は自営業で自分のお店を開いているので、私が今日、学校でこんなことを学んだよと話すととても興味深く聞いてくれました。このような出来事をきっかけにさらにビジネスの勉強に励むことができました。

自身の将来志望するのは何かにについて考える機会がたくさ

んあり、今まで就職するとか考えていなかった私に違う道を考えるきっかけとなったことがありました。

私は幼い頃から海外の多様な文化や言語にふれあいたいという一つの夢がありました。そして同時に海外のある問題に興味があり、それは貧困問題です。世界にはたくさんの飢えや飲み水に苦しみ続けている人々がいいます。知識が蓄えられるほど世界の問題について深く考える機会が増えました。知識を蓄えても何もできなかった自分がもどかしいと感じている中、実際に助けを求めている場所に行き、自分の目で現場を見て、直接的に支援したいと思いました。そして考え、導びいたのが開発途上国の企業の発展です。企業の発展は国の全体の活気が増し、貧困人口が減少する一つの方法です。

このような手段で開発途上国の貧困問題の支援をしたいと考える中、そのためには今の知識では足りないことを感じます。このことから自身の進学を考えはじめ、明確に将来の夢がみえてくるようになりました。

しかし、自身の将来の夢は明確になってきた一方、商業高校からの進学は難しいと考えていました。そんな中、自身の道幅を広げてくれたのが資格でした。一生懸命、勉強し取得した資格を利用し、自身が志望とする大学に進学することが可能になりました。

このような出来事をきっかけに私は将来、志望とする姿が「開発途上国である企業の発展の支援ができる会計コンサルティング」になりました。その姿を実現させるのに志望した大学に進学した際には、高校から学んできた商業の経験を活かす必要な資格を取得し、適切なアドバイスができるよう経営理論

を学び、他人への貢献を目標に積極的にボランティア活動に参加し、様々な人と関わっていききたいです。さらに海外市場で必要となる言語への学習にも向上心をもち努力していきます。

そして、自身の目標としている姿になれた際には、人々に信頼され、必要とされる人材になりたいです。目標としている姿になれた後も、常に向上心をもち、努力していききたいです。そして、一人でも多く貧困問題に苦しむ人々を助けるという思考を忘れずに、常に精進していききたいです。

最後に、私は商業高校に進学したことにより資格が取得でき、さらにビジネスについての勉強もできたのが、今考えると、将来の夢にとっても大切な部分を高校生時代に勉強することができたと感じました。将来の夢に直結しなくとも、商業高校で学んできたことや経験はいずれ大人になった際に自分の強みになっていくと感じました。大学に進学した後も高校で学んできたことを忘れず、活かしていきたいです。そしてきつと自身の目指している姿になります。



将来のために

東京都立忍岡高等学校 三年

桐谷海月

私の将来の夢は、保育士になることです。将来、保育士になりたいと思うようになったのは、中学生の時です。もともと子どもと接することが好きで、幼い頃、自分が通っていた幼稚園の優しい先生に憧れていました。その先生の周りには、いつもたくさん子どもたちの笑顔があふれていました。そんな先生を見て、いつか私も子どもたちを笑顔にしてあげられる仕事をしたいと思うようになりました。

そして、中学二年生の時に保育園で三日間職場体験をして、はじめて実際に保育の現場にふれて、保育士の仕事は楽しいことばかりではないということが分かりました。とても大変な仕事だけど、子どもたちの笑顔をみてみると、辛いことや嫌なことがとんでいき、保育士になりたいと思う気持ちが強くなりました。

私は保育士になるという夢に少しでも近づきたいと思い、生活科学科のある高校に入学し、家庭科について多くのことを学んできました。高校に入学してからは、自分の一番やりたい保育のことだけでなく、被服や調理、福祉などの科目を基礎から学ぶことができました。また、授業だけでなく、一年生の時には調理と被服の四級と三級の検定、二年生では、保育の四級と

三級の検定がありました。学校や家で練習を積み重ねていくうちに、多くの技術を身につけることができました。そして、相手の目を見て相手に伝わりやすいように話すことや、ひとつひとつの作業を丁寧な効率性に行うことの大切さを知ることができました。

保育士になるために努力していることが二つあります。一つは歌とピアノです。歌もピアノもあまり得意ではなく、ピアノはほとんど弾くことができません。なので、子どもたちと一緒に楽しく歌うことができるように練習をしています。もう一つは、絵の練習です。子どもたちに喜んでもらえるようなかわい絵が描けるように、工夫しながらものや動物などの絵を練習しています。三年生でも保育の検定があるので、それに向けてもっと練習を重ねていきたいと思っています。

今までは、自分の思いどおりにできなかったり、失敗してしまったりすると、すぐにものごとを諦めてしまっていて、とても後悔してしまうことが多かったです。しかし、失敗しても諦めずに何度も挑戦したり、努力することによって、今まで諦めたり、失敗したりしてできなかったことができるようになると思うので、これからはすぐに諦めないで色々なことに挑戦していきたいと思っています。

また、保育士は、子どもたちの成長を見守り、保育するとても大切な仕事で、保育士が子どもたちと接する時期は、子どもひとりひとりの人格や行動が決まる時なので、とても大事な時期だと思います。なので、子どもたちをサポートする大事な仕事だからこそ、子どもたちの成長や発達について正しく理解し、ひとつひとつのことを丁寧に行うことや諦めずに最

後までがんばりたいと思います。今まで学んできたこと、そしてこれから学校の授業や日常生活の中で学んでいくことを活かして子どもたちが楽しく遊び、遊びの中でルールや人間関係などを覚えて、しっかりと学んでいけるように子どもひとりひとりと丁寧に接し、子どもの目線に立って子どもの気持ちに寄り添い、しっかりと向き合える保育士になることを目指してがんばっていききたいと思います。

これから、たくさんの壁にぶつかることもあると思うけど、その壁を乗り越えていくことができるように諦めずに一生懸命努力し、今まで学んできたことを今後の行動やこれから学んでいくことに活かしていきたいと思っています。そして、良い保育士になるために仲間を大切に、自分の行動に責任を持ち、自信をつけていききたいです。



将来の夢

東京都立忍岡高等学校 三年

牧 京 香

私の将来の夢は、管理栄養士として、保育園で美味しい安全な給食を提供していくことです。小さい頃から、料理を作る母や祖母のお手伝いをしていたため、調理することが好きでした。そして、成長するにつれて栄養についても興味をもち、目を向けるようになりました。具体的に「管理栄養士」という夢をもったのは、小学校六年生の頃でした。私のクラスには、重度の食物アレルギーがある女の子がいました。その子は、給食の時間になると自分で持ってきたお弁当を持って保健室に行き、いつもたった一人で食べていました。私は、その姿を見て、みんなと一緒に食べられるような環境を作りたいと考えるようになりました。

中学校に上がり、いよいよ自分の進路について真剣に考える時期になりました。たくさんの学校を調べていく中で、生活科学科という聞き慣れない学科を見つけました。この学科は、食のことはもちろん、保育や被服などの家庭科全般を学ぶことができ、自分の好きな科目を選択して学んでいくことができる、とても魅力的な学科でした。私は将来の夢に向けて、高校から生活科学科で、より専門的な技術を学ぶという進路を選びました。

高校の授業では、主に食についての基礎知識、栄養バランス、調理技術について学んでいます。特に、栄養の授業では、現代人が不足しやすい栄養素、過剰摂取しやすい栄養素について学び、改善策を考え、調理実習を通して実践に繋げるなどの貴重な経験をしました。その中で、幼児期の食事の大切さについて学ぶ機会がありました。幼児期の食事は、栄養バランスの取れた食事を与えることで身体の成長や味覚の発達などを促し、食べることへの興味や食事のマナーなどを身につける重要な役割を担っています。このように、幼児期の子供が成長していく上で栄養バランスの取れた食事は何よりも大切です。しかし、食物アレルギーを一番発症しやすいのもこの幼児期になります。私は、発症しやすい時期の子供たちに給食を提供する保育園や幼稚園では、どのような対応をしているのか、とても気になっていました。

すると、夏に行った大学のオープンキャンパスで、実際に保育園での勤務経験のある管理栄養士の方のお話を聞きました。保育園や幼稚園では、安全性を最優先するために、重篤化しやすいアレルギー原因食物、例えば、蕎麦、ナッツ類、甲殻類などは完全除去することを基本として、ところがほとんどだそうなんです。他には、鶏卵、牛乳、小麦をはじめとする、食物アレルギー対応が必要な子の分だけ、代替食を用意するなどの対応でアレルギーの発症を防いでいるということを知りました。最近では、アレルギーがある子供が増えてきていることから、対応には十分に気をつける必要があると話してくださいました。

私は、この話を聞いて、より自分の夢が明確になった気がし

ました。幼児期の食事の時間は身体を大きく発育、発達させると共に、心の成長にも繋がる大切な時間です。食事を通してさまざまな経験を積み重ねること、子供の五感を豊かにし、生きる力の基礎を育むことになります。これらのことから、子供たちにとって食事とは、何にも変えることができない唯一無二の時間だということがわかります。食物アレルギーがあるからといって、みんなと同じものが食べられない、楽しい食事の時間をみんなと共有できない、こんな寂しい思いを子供たちにし欲しくありません。だからこそ、代替食の対応ではなく、食物アレルギー対応の全員給食を多くの保育園や幼稚園で実現していくことが、子供たちの笑顔に繋がるのではないかと私は考えます。

実現していくために、高校で学んだ栄養や食についての知識、調理技術をしっかりと活かし、これから、さらに高度な専門的知識、技術、考察力を身につけていきたいです。そして、食事の時間を子供たち全員が、幸せで楽しい空間として認識してくれるような環境づくりをしていくことが私の今後の目標です。



病棟保育士への夢に向かって

東京都立忍岡高等学校 三年

榎 西 寧々花

私は将来、病棟保育士という仕事に就きたいと思っています。なりたいたいと思っただけは自分の入院経験からでした。

私には持病があり小学生の頃から病気が悪くなったら長期入院をしていました。はじめて入院した小学生の頃に病棟に入院する子ども達と遊んだり心理的ケアをする職種があることを知り、自分は絶対この仕事をするんだと思ってきました。中学の頃に再入院した時に一人の保育士さんと出逢いました。その保育士さんは、保育士というよりも同級生の友達くらい、良い意味で保育士さんぽくなくて一番スタッフさん達の中で近い存在でした。そしてその保育士さんはいつもたくさんのイベントを企画してくれて、病院にいたことを忘れてしまうくらいわくわくして、いつもベットから出ない子もあまり元気がなかった子も嘘みたいにニコニコして、目をキラキラ輝かせていてそれはまるで魔法のようでした。その保育士さんに私はあこがれて病棟保育士になると思うようになりました。

高校を選ぶ時も私は進路が明確に見えていて少しでもはやくから保育や福祉のことを学びたいと思い、普通科に行くことを悩んでいた時にみつけたのが今の高校でした。入学して一年生の時は自分のやりたい授業じゃないものがほとんどで

辛いなと思ったことが多かったですが、被服、食とさまざまな幅広い分野の基礎を学ぶことで得たものがとても多かったと実感しています。

高2の冬に私はまた病気が悪くなり入院しました。まわりは全員私よりも年の下の子ども達です。0歳〜高一までたくさんの子ども達がいってさまざまな年齢の子ども達と遊んだり話したりしました。同じ五歳でも一人一人できることが違うこと、言語の発達の差、子ども達一人一人に接し方を変える保育士さんの対応やはたらきかけを近くで見れました。高校で学んだ保育の知識が点と点でつながり、わからないところは直接保育士さんに聞いたり、食を学んだことで今までたまたまと思っていた病院食が薄味だけだしを使い風味を出していることがわかったり、大嫌いで不得意な裁縫も久しぶりにやってみると思ったよりできていたり、学校を離れてみて自分が学んできたことに無駄は一つもなかったこと、そして学んできたことが自分の自信に繋がっていることを実感しました。今回、高校で学んで入院して知識が増え、一番今までの入院の中で捉え方が変わったのが食事でした。食べられなかった病院食も知識が増えたことで食べられるようになる、そして食事はとても大切な時間だと思ひ、子ども達に知識を少し教えてあげられれば変わる子もいるかもしれないと思ひ、課題研究



として食育を実施しました。子ども達に食育を実施する時、私の教えたことがこの子達の知識になるんだと思うと間違ったことは教えられないという気持ちが大きく不安でとても緊張しました。目をキラキラさせて私が作った絵本をみて、後日男の子はすごく嬉しそうに「お野菜食べられたよ!!」と教えてくれ、男の子のお母さんも絶対食べなかったほうれん草やキャベツが絵本にのってるからと食べてくれたと喜んでくれました。その時本当に嬉しくて涙が出そうになりました。そしてこれが保育というものなのだろうなと感じました。

私はこれから先高校を卒業したら専門学校に進学し、資格を取得して保育園で数年経験を積んで病棟で働くことが理想です。病棟保育士として経験を積んだら、私が入院した病院で病棟保育士として色んなことをしたいです。入院患者だった当事者の視点からじゃないとみえないもの、気づけないことが沢山あると思います。病棟に学校だけでなく保育園を作ったり、入院する前の生活と少しでも同じように生活できるようにしたりすることや、わくわく、ドキドキ、笑顔が病棟中に広がるような病棟保育をしたいです。そして、いつも子どもとその家族に一番近い存在で支えられる保育士になりたいです。

私が病棟保育士になりたいと思ったのは病院での出逢いが大きいです。保育士さん達はもちろん、主治医や担当医の先生達が家族のような温かい人達だった事、心理士さんや全てのスタッフさん達が一番に子ども達を想ってくれる温かい環境があったからこそだと思っています。そして、勉強も運動も得意じゃなくて自信がなかった私が、高校で自分の好きな

事を学んで、がんばることができると教えてくれた高校。夢に向かって一緒にがんばることのできる友達に高校で出逢えて自分もたくさん刺激を受けました。普通とはちょっと違って思ってた高校生活とは違いましたが、私は今の高校を選んで過ごした時間は一生の財産だと思います。

折り合いをつける

東京工業大学附属科学技術高等学校 三年

高 杉 真由子

善悪の判断などというものは、誰でも持っているものではないだろうか。高校生になって、改めて「技術者倫理」という、如何にも道德の授業のようなものを習う必要があるのだろうか。これは、私がこの授業を受ける前に感じたことだ。もし、「倫理」という科目ならば、公民科の科目としてギリシャ哲学や仏教に関することなどを習う。しかし、これは違う。私にとって謎な授業であった。

そして、謎なまま授業が始まった。「技術者倫理」という科目は、私の通っている高校が指定を受けたSGH（スーパードグローバルハイスクール）研究開発で作られた新設科目である。どうも他の高校では、この授業はされていないらしい。高校ではやらないが、大学の工学部ではこの科目を学ぶのだという。どおりで分からない筈である。そこで「技術者倫理」

の本を手にとって読んでみると、技術者が関わった事件事例の紹介に、多くの紙面を割いている印象である。私が学んでいる建築分野の事件も数多く載せられている。耐震偽装事件、コンクリート加水事件などをはじめ、最近では、賃貸アパート大手会社の建築基準法違反が世間を騒がせている。これらの事件は、消費者を怒らせるだろう。なぜなら、消費者は何かを買う時に、製作者やメーカーを信用して購入に踏み切るはずだからだ。それゆえ、もし事故が起こってしまったらどう対処するのかということは、確かに大切なことのように思った。

しかし、先生の授業は違う。起こってしまったことにどのような始末をつけるのか、ではなく、起こさないようにするためにどうしたら良いのか、が大切なのだという。それを踏まえて、ゲーム型教材を使って、技術者が会社内で置かれる立場を仮想的に体験した。この教材では、上司が利益を優先しようと圧力をかけてくることに対し、プレイヤーである技術者が安全で安心なものを作るために、様々な案の中から事件が起こることを回避できる案を提案する。そして、その案を採用して貰えるように自分で考え、プレイヤーの言動を選択する。ゲームの中では、高校に通っているだけでは殆ど経験しない、理不尽な要求を受けるという場面を体験した。先生によると、会社の中では、「雇われている」技術者と、「雇っている」経営者が指示する現実にはギャップがあるという。このギャップにどうにか折り合いをつけることができた時、それこそがプロフェッショナルになるといふことらしい。これは私たちが大人になるといふことと同じことのように思う。

理想の自分と現実の自分、このギャップに折り合いがついた時、私たちは大人になるのだと考える。

私が学んでいる建築デザイン分野においても、「技術者倫理」の考え方は常に必要である。設計行為というものは、学術、技術、芸術の三つを融合し、合意形成をしていくものである。また設計者は、建築主や施工者、そして使用者など様々な人に対する責任を一つずつ果たしていかなければならない。また、自分自身で設計する時には、予定地の周りを取り巻く環境を調べ、それと自分が創造したいデザインが合っているのか、そして利害関係者のニーズに応えられるか、経年変化や予期せぬ状況にどの程度耐えられるのかなどを吟味する。その際、建築基準法が指針となるが、この共通で最低基準となる指針に加え、過去の事例も参考にして設計に取り掛かる。そして、建築科目の先生に何度も相談しながら完成させることが肝要である。例えば、広々とした空間とするために柱を少なくしたデザインを考える時は、外壁は強靱なものにしなければならぬ。また、使用者の年齢による家族構成の変化や運動能力の変化、その住居にずっと暮らすものなのか、あるいは別荘のようなものなのかによってもデザインを変更する必要がある。例えば、年を取ってから手すりのない急な階段を上り下りしなければならぬのでは、設計が十分とはえない。しかし、便利なものはコストがかかるもので互いにコミュニケーションをとりながら、妥協点を見つけなければ、トレードオフは解消できない。また、「安心」を求められた時、震度5で全くどこも壊れないことが安心なのか、少なくとも原型を留めることが安心なのか、などの考えは人によって違

う。この場合も、どこまで安全であれば住む人が安心していられるのか、コストの折り合いが必要となろう。

私が材料科学に関する実験をする時に、しばしば理論値と全く違う結果が出ることもある。そのような時には、なぜそのような結果になってしまったのか考察し、改良点を見つけてレポートにまとめる。そのようにすることで、次に実験をする人が理論値に近い値の試験体を作ることができるようにする。実験とはいえ、失敗は隠したいものではある。しかし、隠し通してしまったら、いつまで経っても改善されない。だから失敗は検証し、次に繋げる必要があるのである。

このような建築の授業の中で、最初は謎であった科目がとても大切な科目であることに気付いた。専門科目を学べば学ばほど、そう感じている。今は、コストのことは気にせずに、そのうえ好きなようにデザインを考えたり、建築物の建設で使う材料の研究をしたりしているが、理想と現実の板挟みになってしまいうことがよくある。仕事とした時には、もっと先回りして考えなければならぬことが増えていくのだろう。

しかし、社会に貢献したいという気持ちは変わらない。将来、工学系の研究をし、社会の役に立つ

モノづくりに関わることをできるようになった時、「技術者倫理」の考

え方が私の心の拠り所になるものであると信じている。私は、折り合いをつけるという言葉と生涯付き合いつながり、事故を「起こさないようにする」研究をしたい。



新たに知る

愛国高等学校 一年

構 野 瑠 奈

本校の衛生看護科に入学して、その専門教科の多さに目を疑いました。しかし、それだけ人の命に関わる責務のある職業なのだ和理解しました。いざ授業が始まると、今まで未知の領域だったため、一時間一時間とても緊張していました。覚える量も今までとは比べものにならないくらい多く、授業開始直後は疲労感に追われるばかりでした。それでも、徐々に体の内部のしくみや基本の技術・歴史を知ることが面白いと感じるようになりました。また、多くの先生が病棟での勤務経験があるため、現場での実例を話して下さいます。教科書だけではイメージのわからないことも理解しやすくなります。そして、自分が同じ立場に立った時に一つの指針にもなると思うと看護学科ならではの奥深さを感じました。

やっとのことで、授業の楽しさに気付き始めたある日、授業で先生が「看護師において最も大切なことは上手に注射ができることや患者さんのケガの手当をすることではなく、患者様を理解することです。」とおっしゃいました。患者様が痛みを訴えたとき、どれほどつらいのか自分たちがある程度分からないとその人に合った良い看護は提供できないのだと先生は続けました。

実は私は、今年一月に膝を怪我しました。体調が悪く気分が落ち込んでいるときに、理事長校長先生とお会いする機会があり、次のようにおっしゃいました。

「その痛い気持ちや辛いと感じたことはいつか貴方が看護師になった時、きっと役にたつはずですよ。」「怪我をしたことは辛いかもしれないけど、怪我をしたから貴方には分かる痛みがあるはずです。いつかその怪我が報われる日は必ず来ます。」

実際に看護について勉強していく中で、患者様とのコミュニケーションについて詳しく知っていくと、初めてあの言葉の本当の意味が理解できたような気がしました。どんなに技術のスキルが高くても、患者様のことがわからなくては、その患者様は百パーセント回復ができないのではないかと思います。患者様は医師とは違った近さがあると思っています。ですから、患者様の一番の理解者でなくてはならないのではないかと感じます。他者の立場に立つというのは容易な事ではありません。しかし、患者様が辛い思いをしている時こそ自分ならどうされたいか、どうしたら心と身体の痛みを和らげることができると、常に「自分なら」と考えることが重要なのだと初めてわかりました。

高校生になってもう一つ気付いたことがあります。そのことに気付いたのは看護技術の実習の時でした。初めての実習はベッドメイキングです。実習服に着替え、実習室に入ると実習ができる喜びと緊張が入り混じり、それでも実習ができるという嬉しい気持ちの方が上回っていました。新型コロナウイルス感染症の影響で、いつもより始まりが遅かったため、授業のペースが早く感じました。授業についていくのが精一杯でし

た。

その時、私は下に敷くシーツの作り方に苦戦し壁にぶつかりました。患者様が横になってもずれのないシーツにするため、ベッドの角を三角形にするのですが、なかなか綺麗にできません。先生のご指導を頂いても上手くいかず時間がかり、なかなか次の行程にすすめませんでした。

ベッドメイキングの試験は五分しかなく、その中でシーツ作り以外にもすることがあるので、私はその時「無理」という気持ちがいっぱいでした。そんな時、授業で三年生の先輩からベッドメイキングを教えて頂ける機会がありました。まず、一通り私の動きを見て頂き、その後、アドバイスを細かく頂けました。先輩は三角形を上手に作る方法や、ベッドのしわをなくす方法を教えてくださったので、その場ですぐに試してみました。すると、自分が今まで作っていた三角形の何倍も綺麗な形で作ることができ、ベッドのしわも少なくなりました。自分は「無理」と思っていたので、綺麗に作ることができたことに驚き、同時に嬉しさがこみ上げてきました。

実技試験の日まで、先輩にご指導を頂いた方法を自分のものにするために何度も何度も練習をしました。その後の授業で先生から更に上手くできるようにアドバイスを頂きました。制限時間内にできるように目の前の行程にしっかり取り組むことに重点を置き、自分を信じようと思いました。その時の私には最初の頃抱いていた諦めの気持ちはありませんでした。

実際の試験では緊張のあまり沢山のミスをしてしまい、とても悔しい思いをしました。しかし、練習ではできなかった行程に時間内に進むことができ、そのことを嬉しく感じました。沢

山の練習を重ねたことが良かったのだと思いました。試験の後、先生は

「今回のテストで良く出来なかった人もいるかもしれませんが、技術は沢山練習すれば上達します。諦めずに技術を磨いてください。」

とおっしゃいました。試験後、もったそうすれば良かったと反省することがいくつもあり、落ち込んでいましたが、この先生の言葉で、あまり焦らず、コツコツと積み上げることです習熟すれば良いのだと初めて感じました。自分らしく、自分なりの方法で更に技術を向上させていきたいと思っています。

約二ヶ月の第一学期。初めて学んだ看護の専門教科。自分の全く知らなかった看護の世界には、とても奥深く、壮大な世界が広がっていました。こういう世界だからこそ学び甲斐があり、難しくても頑張ろうという気持ちになります。まだ、始まったばかりで、これから数多くの困難が待ち受けているかと思いますが、自分らしく挫けず前を向いて進んでいきます。



看護師と人

愛国高等学校 二年

杉 本 未 来

私は将来看護師になることを目指しています。看護師とは対人関係が基本となる職業です。患者様が入院すると初めに情報収集をします。既往症等だけでなく、家族構成や趣味など幅広いことを一度知ってから、患者様とコミュニケーションをはかります。そして患者様はもちろんのこと、患者様の一番の理解者であるキーパーソンとなる人々との信頼関係を築くことが大切です。入院されることによって、ご家族のバランスが崩れ、悩みや焦りが生まれることも少なくありません。その思いを打ち明けるには信頼関係が必要になります。それが欠ければ、時には患者様の治療に影響を与えてしまうことがあります。また患者様やご家族の要望や不安は担当する看護師だけでなく病院に関わる様々な職種と共有し、医療者同士の認識にズレがないようにします。認識のズレがご家族の不安の原因や、治療方針にも影響を及ぼします。的確な情報の共有が大切になります。このように、看護師は患者様だけではなく、多くの人と常に繋がっています。

私は、専門科目の授業の中でさせて頂いた介護老人福祉施設での実習を通して、実感しました。私はグループホームで認知症を患った利用者様が入居している施設に実習をさせて

頂きました。まず自己紹介をして、利用者様のお名前や趣味を伺いました。時には施設のスタッフの方にお力をお借りして、コミュニケーションを積極的に行えるようにしました。

ある利用者様の食事介助をさせて頂いた際、目を合わせてくださることがなく、信頼関係が上手く築けていないことが分かりました。そのため、レクリエーションを行った時には積極的に目を合わせて距離を縮めようと試みました。その後のおやつ、食事介助を行った際、お声を掛けると、顔をゆっくりと閉じて意思表示をして下さいました。喜びと同時に、コミュニケーションを図ることやその結果が表れるには時間がかかるのだと実感しました。入浴介助をさせて頂いた際も声かけなどはタイミングが難しく、工夫をすることが大切だと感じる経験が出来ました。実習はあつという間に終わり、最終日に挨拶をするとう優しく声を掛けて下さった利用者様もいらつしました。なかなかコミュニケーションが取れず大変に思うこともありましたが、その一瞬で自分の行動が無駄ではなかった、声を掛けて良かったと心から思いました。初対面の方とここまで距離を縮められ、思いが通い合う感覚を感じられる経験が出来て良かったなと思いました。この経験は、看護師として現場に立つことが出来ても忘れないと思います。

看護師が常に人と繋がる仕事であると痛感した出来事はい一つあります。それは「臨床看護概論」という授業を受けた時です。先生は「ケアをしたり患者様の話をゆっくり聞いたりする以外にも、そつと見守ることも支えになる時がある」と仰っていました。また「不安は大きくなると不穏となり、患

者様の治療に影響を及ぼすこともある」とも仰っていました。不穏とは、周囲への警戒心が強く、落ち着きがなく、興奮している状態のことです。状況が悪化してしまうと退院が延長することもあります。そのような事態を招かないよう、看護師はチーム医療で患者様とご家族を支援していきます。このように、看護師の仕事は直接的なケアだけでなく、間接的なケアである見守りもとても大切な役割だと感じました。

看護師は常に人と人との関わり合う職業です。近い将来AIと呼ばれる人工知能がほとんどの仕事を出来るようになり、人間の仕事が減少すると言われていきます。しかし、看護師だけでなく、人と人が関わり合う職業は、AIだけでは解決しきれない仕事が出来ると考えています。それは心を汲み取るということ、AIには与えられた仕事を完璧に行う能力がありますが、相手の思いを考えてそれを先回りして行動に移す、ということまではむずかしいのではないのでしょうか。人間は倫理観やジレンマに寄って悩むことが多々あります。何かしてもらうと嬉しくなったり、訳もなく心が痛め付けられたりします。でもその悩みは、心があるからこそ起こることです。悩みは相手を思い合うことで生まれます。人間にしか出来ないこの行動こそ、価値があることだと思います。看護師の仕事も、自分の発した言葉や行動全てが、良くも悪くも直接患者様に反映されます。言葉の一つ一つで、感謝ややりがいに繋がっていくと思うのです。私は将来、看護師という職業に就くことが出来た際には、人間らしい優しさを持った接し方が出来るようにしたいと考えています。その日の為に、これから看護学生として勉学に日々励んでいきたいと考えています。

私の未来設計図

日本工業大学駒場高等学校 二年

野口 俊輔

今、AIの技術がすさまじい速度で進歩していて、10〜20年後には多くの仕事人がAIに代替すると言われていている。私は高校で工業科に通い、建築を中心に学んでいる。

授業の中で、建設などの現場ではまだ完全ではないが、無人による施工などの機械がもう既に導入され始めているということを知った。例えば今は人が設計などをしているがいつかはAIが設計などをするようになるかもしれない。しかし、私は人の心を惹きつける魅力的な建築は決してAIの力だけではつくることが出来ないと考えている。

私の将来の夢は、設計士になってドイツのミュンヘンにあるBMWワールドのような建物の図面を書くことだ。なぜこのような夢をもったかという父が建築関係の仕事をしており小さいころから様々な建築物を実際に見たり、本や資料などを見たりしてきたからだ。そして、初めてBMWワールドを見たときにとっても感動した。BMWワールドは特殊なガラスを多く使用しており、独特な雰囲気を出している。内部は外の雰囲気と打って変わって開放的な雰囲気の空間になっていて訪れる人を迎えてくれている。

初めてBMWワールドを見たときの感動はすぐ昔のこと

なのにまるで昨日のこつのように思い出すことが出来る。建築のことについて勉強できるのは大学や専門学校に入ってからと思つていたが中学校の先生に高校にも建築が学べる学科があることを教えてもらつて、現在は建築の基礎を学びながら高校生活を送っている。

製図の授業では、まず製図板や定規を使って書く手書きの製図とパソコンを使って書くCAD製図があることを知った。昔は手書きの製図が主流だったが最近ではパソコンが普及していき、段々とCAD製図が主流になっている。今はまだ小さい二階建ての一軒家の図面しか書いていない。いつかはBMWワールドのような大きい建物の図面を自分で考えて書けることを想像して今からとてもワクワクしている。

高校に入ってから学んだことで一番興味を引いたのが建築物と地震についてのことだ。日本は地震がとても多く建築物を建てたり考えたりする上で切つても切り離せない問題となっている。何が私の興味を引いたかという地震に対する研究が日々進んでいるということだ。最近では免震構造という地震の揺れを受け流す構造があり、それは建物と地面の間に免震装置を設置して、地面と切り離すことで建物に地震の揺れを直接伝えないというものだ。こういう地震に対することの研究をして、新しい地震に対する構造や免震装置の改良などを開発するのも面白そうだと思つた。

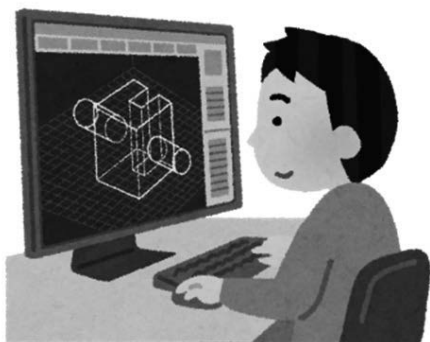
CAD製図にしても免震構造にしても技術の進歩を感じて今後建築の可能性はどんどん広がっていくと考えている。そして近年注目を集めているのがAIの技術だ。スマートフォンなどにあるAIアシスタントは随分と身近なものになり応答

の精度も上がってきている。ロボット掃除機やドローンも手頃な値段で購入できるし、高齢単身者のコミュニケーション相手としてAIロボットが期待されているという話も聞く。昔飼っていたペットが死んでしまつてすごく落ち込んでいた時に身近な人達に温かい言葉をたくさんかけてもらつて救われた経験が私にはある。この時も私に言葉をくれたのがAIだったから、同じように救われただろうか。おそらく、AIとは会話をすることは出来ても人間の気持ちを汲んで人の心を救うことはできないだろう。人は、相手と関わりその経験の中で想像力を働かせて互いに必要なコミュニケーションを取っている。そこにAIにはない人間の良さを私は感じてならない。

私が将来建築物を作る上で大切にしていきたいことは、童心を忘れずに見ていて楽しい建築物をつくっていくことだ。確かに利便性や住みやすさも一定以上は必要だと思う。だが私はその建築物を見た人全員、子供から大人、建築関係の仕事に関わっている人いない人、みんなが驚いてくれるようなものをつくっていききたい。これは、AIには出来ない人間だけができることだ。

私の最初の夢は、設計士だ。しかし、高校に入つて自分に心境の変化が起こっているのを少しずつ感じている。昔は建築関係の仕事は大工さんと設計士しかいないと思っていた。しかし実際には一つの建物が出来上がるまでに数えきれないほどの人が関わっているということがわかり、すごいと思った。だから今は、設計士というものとらわれずにこの先大学、専門学校、はたまたそれ以外かはわからないが、今以上に建築について学んでいって自分に一番向いていることを仕事にしていきたい。

たい。今はAIの技術がすさまじい速度で進歩していて、いずれ人の力はいらなくなる日が来てしまうかもしれないが、多くの人の温かみと力の入った建築物はAIだけではつくれない。人が感じながらつくつたプロセスの中に建築物の魅力は生まれるのだと思う。私は高校やその先で学んだ知識や技術を最大限に活かしながら、人を守り、人を楽しませ、人を感動させる建築をつくり、社会を明るくしていきたい。



専修学校の部 佳作

二つの夢を追いかける

中央工学校 一年

今 野 玲 奈

「将来何になりたいの？」そう聞かれるたびに私はずっと、有名なアーティストさんのバッグダンサーになる。そう言い続けてきた。しかし、十八歳になり、就職先にも関わってくる最後の進路選択で選んだ学校は、工業系の専門学校である。今の学校に決めるまでにいくつかのきっかけがある。

ダンスを本気で学ぶために高校二年生の春から、とあるダンススクールに通い始めた。

そのダンススクールで一番上のクラスまで上がって絶対誰からでも認められるようなダンサーになる。そう意気込みながら入校。まずは、一つでも多くの演目を頂く。だから自分自身で、出来る限りの基礎練習・ルーティンのシルエット確認、フリーダンスを考えるなど毎日睡眠時間を削ってまでダンスにあけ暮れていた。その結果クラスが上に上がることが出来、サポーターダンサーとしてミュージックビデオやライブに出演等のありがたいお声がけを頂いた。その依頼で、ステージに立ってスポットライトを浴び、お客さんの前で踊ることが楽しくて、嬉しくて、その快感が忘れられなかった。いつかは自分も

好きなアーティストさんのように誰かに夢を与える側に立つ。だったら、表方に立たなければならぬとずっと思っていた。

高校二年生、そんな考えしかなかった私の目の前で、一緒にゲネプロを行うアーティストさんが入ってステージを見た際に涙ながらに「感動しすぎて言葉が出ない。言葉では表しきれない」とおっしゃっている光景を目にした。その時、私は気づかされた。裏方でも人に感動や夢を与えられること、私の夢は立つ場所を制作・設営してくださる方から頂いた夢であるということに。

ここから私はステージ製作への道にも惹かれ始める。でも、現場には男性の方ばかりで、やっぱり女性には向かない職なのかと勝手に思っていた。しかし、その憶測を覆すことが起きる。高校三年生の夏休みも終わりに差し掛かうとする時、あるミュージックビデオのサポートダンサー出演のお声を頂いた。そのミュージックビデオのワンシーンには、野外で大きな道具等を配置し、撮影する場面があった。そのセットを造ってくださる方々の中に男性と一緒に製作にあたっている一人の女性がいた。驚きと、その女性のカッコ良さに惹きつけられ、待機時間、休憩時間など、自然とその女性の姿を目で追っていた。撮影期間が終わり地元に戻るころには、目で追っていた女性の存在は憧れになっていた。

そこからの私は、進路の選択を明確に決めなければならぬ。でも、夢は二つ。関係していることと言えば、どちらもエンターテイメントの仕事であること。でも、裏方と表方で全然違う。ずっと考えてもどちらが正解か分からないと悩んでいた。

そんな時、母も「一度はダンスの道に進もうとしたんだよ」と言っていた。でも母の仕事は介護福祉士の仕事をしている。理由を母に聞くと、最初は私と同じ舞台上にたつことが夢だった。でも、手に職を持っていたかったらしく、一番興味のあった今の仕事に進み、資格をとったと言っていた。周りを見る目、考え方が変わる瞬間であった。ダンススクールで教わっていることも大事な糧である。でも、インストラクターの方々には、あくまでも成功したからこそ今の立場にいるが、その反面失敗等で違う道を歩んでいる方も少なからずいる。

そう考えると自分のダンスの世界観が売れると断言できない。根拠は何もないのだ。だったら、一番、最悪の事態を考えると手に職を持ちたいと思うようになり今の専門学校に在籍させて頂いている。

最後に、コロナの影響でエンターテインメント業界も大きな打撃を受けている。私の姉も同じ業界に採用されたが保留になっている現実と向き合うなら、やっぱり手に職なんだと改めて感じさせられた。でも、このようなご時世でも、ダンサーの夢への挑戦もあきらめない。一日二十四時間皆平等である。一つでも多くの資格取得に向け邁進するとともに、並行し、ダンスの道も磨きをかけ、夢の選択肢を広げ、夢を夢で終わらせずに実現化へ。

自分にとっての最高の将来へ、今日も私は、
「二つの夢を追いかける。」

イラストの部 優秀賞

「明日に生きる」第31号表紙デザイン

中央区立日本橋中学校 三年

土肥優生



令和２年度 作文コンクール応募校一覧(応募数・入選数)

<中学校の部>

番号	設置者	学 校 名	応募数	入選数
1	中央区	佃中学校	10	5
2	新宿区	西戸山中学校	1	1
3		新宿西早稲田中学校	4	1
4	台東区	駒形中学校	1	
5	墨田区	寺島中学校	6	
6	大田区	大森第六中学校	10	
7	北区	赤羽岩淵中学校	9	3
8		稲付中学校	7	2
9	荒川区	第一中学校	1	
10	足立区	西新井中学校	10	
11	葛飾区	堀切中学校	10	3
12		四ツ木中学校	10	1
13	江戸川区	松江第四中学校	10	1
14		松江第五中学校	3	1
15	調布市	第八中学校	9	
16	愛国学園	愛国中学校	7	
合計			108	18

<イラストの部>

番号	設置者	学 校 名	応募数	入賞
1	江東区	深川第七中学校	5	
2	江戸川区	松江第五中学校	1	
3	中央区	日本橋中学校	2	1
4	狛江市	狛江第四中学校	1	
5	小金井市	小金井第二中学校	4	
合計			13	1

<高等学校・専修学校の部>

番号	学 校 名	応募数	入選数
1	東京都立園芸高等学校(全)	9	
2	東京都立園芸高等学校(定)	3	
3	東京都立農芸高等学校	10	2
4	東京都立農産高等学校	3	
5	東京都立農業高等学校(全)	10	3
6	東京都立農業高等学校(定)	1	
7	東京都立瑞穂農芸高等学校	8	3
8	東京都立総合工科高等学校	6	
9	東京都立六郷工科高等学校	1	1
10	東京都立町田工業高等学校	4	1
11	東京都立葛飾商業高等学校	10	
12	東京都立第三商業高等学校	9	1
13	東京都立忍岡高等学校	10	3
14	東京都立東久留米総合高等学校(定)	3	
15	東京都立大島高等学校	3	
16	愛国高等学校	10	4
17	京華商業高等学校	3	
18	東京工業大学附属科学技術高等学校	2	1
19	日本工業大学 駒場高等学校	5	1
20	国際共立学園高等専修学校	10	
21	国際理容美容専門学校	10	
小計		130	20
1	中央工学校	1	1
小計		1	1
計		131	21

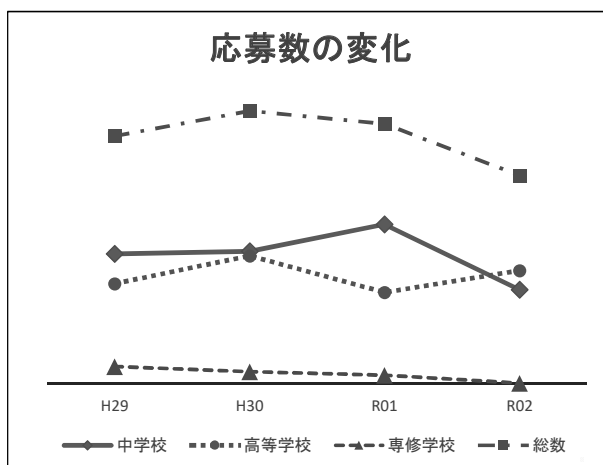
(まとめ)

校 数 (入選校数)	応募数	入選数
中学校 16校(9校)	108	18
高等学校 21校(10校)	130	20
専修学校 1校(1校)	1	1
総 計 38校(20校)	239	39

応募数・学校数・入選数の変化

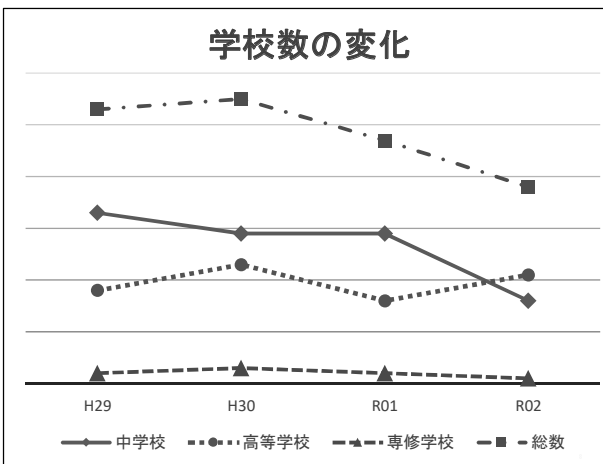
①応募数の変化

校種	H29	H30	R01	R02	平均
中学校	149	152	183	108	148
高等学校	115	147	105	130	124
専修学校	20	14	10	1	11
総数	284	313	298	239	284



②学校数の変化

校種	H29	H30	R01	R02	平均
中学校	33	29	29	16	27
高等学校	18	23	16	21	20
専修学校	2	3	2	1	2
総数	53	55	47	38	48



③入選数の変化

校種	平成29年度(2017)			平成30年度(2018)			令和元年度(2019)			令和2年度(2020)			平均%
	応募数	入選数	%	応募数	入選数	%	応募数	入選数	%	応募数	入選数	%	
中学校	149	23	15	152	22	14	183	19	10	108	18	17	14
高等学校	115	18	16	147	22	15	105	16	15	130	20	15	15
専修学校	20	4	20	14	2	14	10	2	20	1	1	100	39
総数	284	45	16	313	46	15	298	37	12	239	39	16	15

作文のテーマ別応募数一覧

①作文の内容

次に示す学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

- ・中学校における技術・家庭科の学習
- ・高等学校、専修学校、高等専門学校又は短期大学における専門教科の学習
- ・勤労に関わる体験的な学習

②テーマ

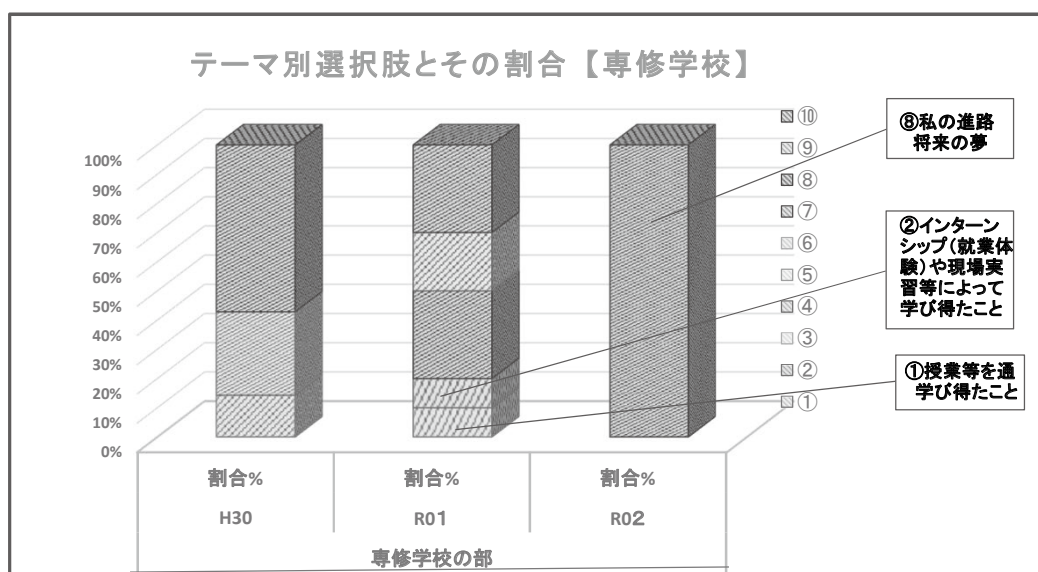
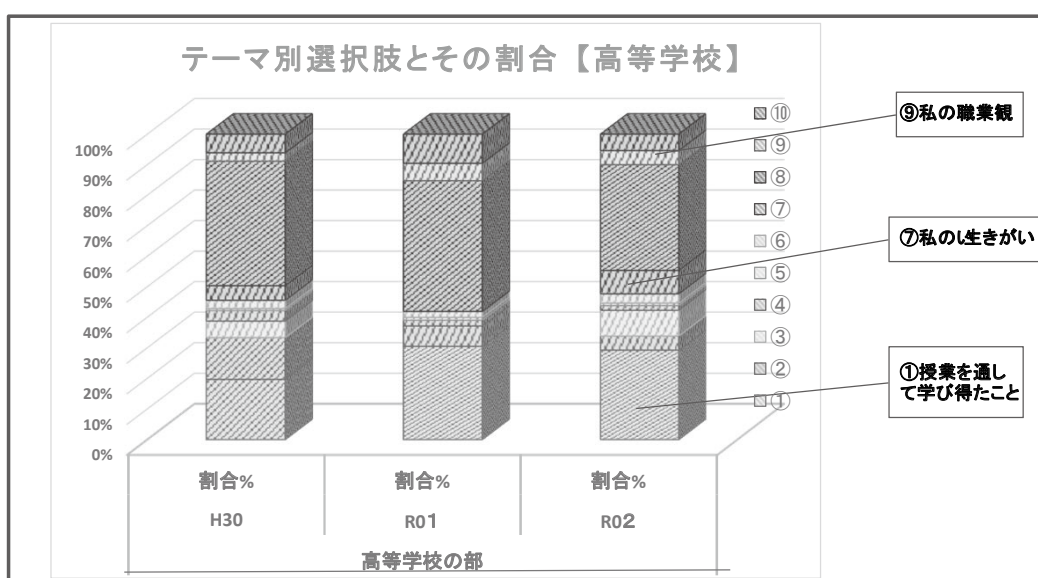
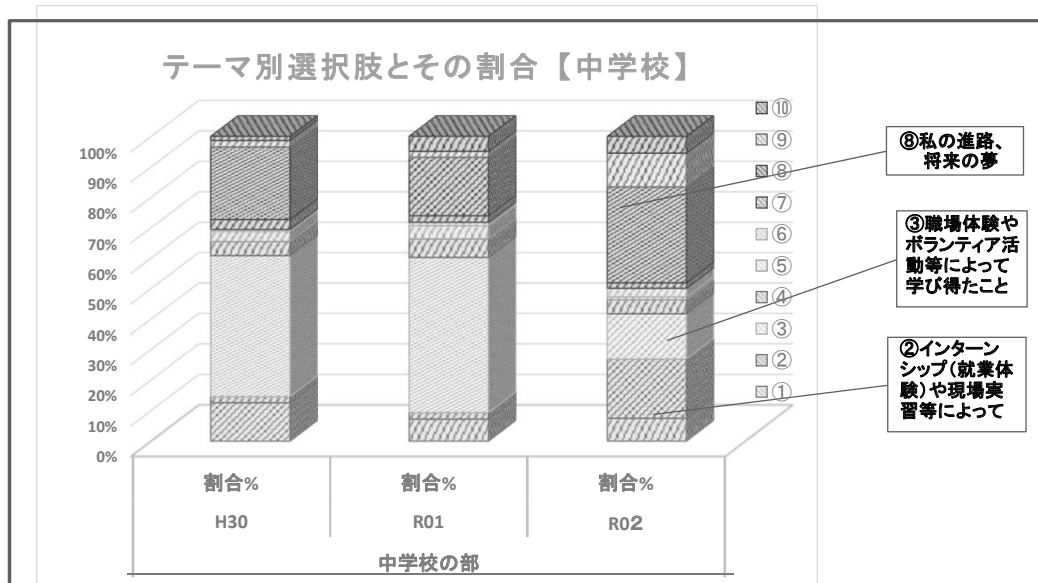
作文の内容について、次のテーマ番号(①～⑩)から関係するものを選択して応募票の欄に記入する。

- ①授業等を通して学び得たこと
- ②インターンシップ(就業体験)や現場実習等によって学び得たこと
- ③職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと
- ④つくることの喜び、ものづくりの喜び
- ⑤働くことの喜び
- ⑥学習に対する心構え
- ⑦私の生きがい
- ⑧私の進路、将来の夢
- ⑨私の職業観
- ⑩その他

③テーマ別選択肢とその割合

テーマ 番号	中学校の部						高等学校の部						専修学校の部					
	H30		R01		R02		H30		R01		R02		H30		R01		R02	
	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%
①	19	13	13	7	8	7	29	20	32	30	38	29	2	14	1	10	0	0
②	3	2	4	2	21	19	20	14	7	7	6	5	4	29	1	10	0	0
③	70	46	93	51	16	15	8	5	0	0	11	8	0	0	0	0	0	0
④	7	5	11	6	5	5	5	3	2	2	2	2	0	0	0	0	0	0
⑤	5	3	8	4	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
⑥	1	1	2	1	3	3	4	3	2	2	4	3	0	0	0	0	0	0
⑦	5	3	4	2	2	2	7	5	0	0	10	8	0	0	0	0	0	0
⑧	36	24	35	19	34	31	60	41	45	43	45	35	8	57	3	30	1	100
⑨	4	2	4	2	12	11	4	3	6	6	6	5	0	0	2	20	0	0
⑩	2	1	9	5	6	6	9	6	10	10	7	5	0	0	3	30	0	0
計	152	100	183	100	108	100	147	100	105	100	130	100	14	100	10	100	1	100

作文のテーマ別応募数グラフ



令和2年度 作文選考委員名簿 (順不同・敬称略)

中学校の部

委員長	荒川区立第五峡田小学校	校長	出井 玲子
委員	江東区立深川第七中学校	校長	佐川 明夫
委員	狛江市立狛江第四中学校	校長	猪瀬 政幸
委員	中央区立日本橋中学校	副校長	磯田 耕司
委員	町田市立真光寺中学校	校長	矢島 加都美
委員	小金井市立小金井第二中学校	校長	川井 まさよ
委員	世田谷区上祖師谷中学校	副校長	毛利 慎治
委員	江戸川区立松江第五中学校	副校長	濱川 一彦
委員	稲城市立稲城第一中学校	校長	跡邊 昭枝
委員	足立区立伊興中学校	副校長	千葉 千登勢
委員	教育庁指導部義務教育指導課	統括指導主事	鈴木 太郎
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	宮西 真

高等学校・専修学校の部

委員長	東京都立農産高等学校	校長	伊達崎 広
委員	東京都立墨田工業高等学校	校長	杉浦 文俊
委員	東京都立荒川商業高等学校	校長	新井 智恵子
委員	東京都立大崎高等学校	副校長	小川 直哉
委員	杉並総合高等学校	校長	西村 伸二
委員	京華商業高等学校	広報主任	小口 浩史
委員	日本工業大学駒場高等学校	教諭	友利 麻衣
委員	ハリウッド美容専門学校	広報室業務推進主任	橋田 修
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	小野寺 伸樹
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	佐伯 徳秀

あ　と　が　き

はじめに、令和二年度の作文コンクールの受賞者の生徒・学生の皆さんには心よりお祝い申し上げます。

さて、「明日に生きる」作品集も第31号の発行になりました。今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、緊急事態宣言の発令により、学校の臨時休業の期間が長期に渡るなど、困難な学習指導の状況下での作文指導に取り組まれました先生方に御礼を申し上げます。

多くの生徒・学生の皆さんの感性溢れる作文・イラスト作品を多数寄せ頂きまして、誠に有難うございました。

さらに、夏休みが短いなども重なり、この様な例年と異なる状況下での御指導に、重ねて感謝を申し上げます。

イラストの部では、今年度は中学生の応募作品の選考となりました。御一人ひとりの豊かな表現力あふれた作品を多数応募頂きました。選考委員会において当会の31号の表紙にふさわしいものになるよう選考して頂きました。

イラストの指導をされました美術担当教員、美術部の顧問の先生方には、御礼を申し上げます。

表彰式はやむなく中止とさせて頂きました。

当初は、御後援を頂きました東京商工会議所を会場として開催する計画でした。東京商工会議所の皆様方に、御礼を申し上げます。

おわりに、当会作文コンクールは、主人公である生徒・学生の皆さんが明るく伸びやかな気持ちで人間として豊かな力をつけていく場です。

今後もこの作文コンクールを通じて、広く生徒・学生の皆さんが産業振興への関心を高め、意義を捉える機会となることを願ってあとがきいたします。

明日に生きる 第三十一号

― 作文コンクール入選作品集 ―

令和三年三月一日 発行

発行 東京都産業教育振興会

〒一六三―八〇〇一 東京都新宿区西新宿二―八―一

東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内

電話 〇三―五三二〇―六七二九

FAX 〇三―五三八八―一七二七

印刷 株式会社 モモデザイン

